

[目次]

日本生態学会各賞候補者募集	1
第 64 回日本生態学会大会案内	5
第 63 回日本生態学会大会（仙台）開催報告	11

記事

I. 一般社団法人日本生態学会平成 28 年度定時総会、代議員会、 各種委員会において報告・承認・決議された事項	15
A. 報告事項	15
B. 審議事項	25
II. 第 63 回日本生態学会大会記録	30
III. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について	34
IV. 学会各賞受賞者	34
V. 書評依頼図書	34
VI. 寄贈図書	35

お知らせ

1. 公募	35
-------------	----

書評	36
----------	----

公募カレンダー	40
---------------	----

日本生態学会役員・代議員・委員一覧	41
-------------------------	----

京都大学生態学研究センターニュース	44
-------------------------	----

日本生態学会各賞候補者募集

第15回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本学会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第21回「日本生態学会宮地賞」

生態学に大きな貢献をしている本学会の若手会員に対して、その研究業績を表彰することにより、わが国の生態学の一層の活性化を図ることを目的とするものです。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、「日本生態学会宮地基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

第10回「日本生態学会大島賞」

例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、「日本生態学会大島基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

第5回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として3名の受賞者を選考し、「日本生態学会鈴木基金」から各々5万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<http://www.esj.ne.jp/>) よりダウンロード
3. 送付先：
（郵送） 〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
（〇〇は応募する賞名を入れて下さい）
（電子メール） office@mail.esj.ne.jp
4. 締め切り日：2016年8月18日（必着）

日本生態学会賞規則

- 第1条 日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会宮地賞規則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。

また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3ヶ月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地基金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会大島賞規則

第1条 日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の中堅会員を主な対象とし、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。

第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。

第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3ヶ月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および大島基金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）規則

第1条 日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。

第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および鈴木基金より賞金5万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

第 64 回日本生態学会大会（東京）案内

第 64 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ64）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。

大会実行委員会

第 64 回日本生態学会大会（ESJ64）実行委員会

大会会長：小泉博（早稲田大学）、大会実行委員長：関川清広（玉川大学）

大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/64/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします（学会事務局にお問い合わせいただいても対応できません）。

大会に関する最新情報は、大会公式ホームページで確認して下さい。

日程・会場

2017 年 3 月 14 日（火）～ 18 日（土）

早稲田大学早稲田キャンパス (<https://www.waseda.jp/top/access/waseda-campus>)

詳細は次号のニュースレターでお知らせします。

提案・申込の受付開始・締切

【受付開始】

シンポジウム企画提案 2016 年 7 月 1 日（金）から

英語口頭発表賞エントリー 2016 年 7 月 1 日（金）から

他の申込み 締切の 1 ヶ月程度前から

【締切】

講演者・企画者で新規に入会（未納退会で再入会を含む）する方の入会申込 2016 年 10 月下旬（予定）

（入会方法は学会ホームページ <http://www.esj.ne.jp/esj/> を参照）

シンポジウムの企画提案 2016 年 9 月 1 日（木）17:00

英語口頭発表賞エントリー 2016 年 9 月 1 日（木）17:00

企画集会申し込み 2016 年 11 月 1 日（火）17:00

自由集会申し込み 2016 年 11 月 1 日（火）17:00

一般講演申し込み 2016 年 11 月 1 日（火）17:00

講演要旨登録 大会の約 1 ヶ月前（予定）

一般講演口頭発表用ファイルの登録 大会の数日前（予定）

※スケジュールに変更の可能性がありますので、適宜、大会公式ホームページで確認ください。

※すべての締切に関して、締切後の追加や修正等の依頼には、対応できません。

大会参加資格一覧

会員種別ごとの参加資格は以下の通りです。なお講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧ください。

講演種別 \ 会員種別	正会員	非会員
一般講演（口頭・ポスター）	○	
シンポジウム企画	○	
シンポジウム講演	○	○
シンポジウム・企画集会・自由集会のコメンテータ *1	○	○
企画集会企画	○	
企画集会講演	○	○ *2
自由集会企画	○	
自由集会講演	○	○

*1 要旨を登録しないコメンテータ。要旨登録を行うコメンテータの資格は「講演」に準じます。

*2 大会企画委員会・大会実行委員会が特別に認めた場合に限り、集会あたり1件まで可能です。

- ・非会員が講演・企画を希望される場合は、2016年10月下旬（予定）までに学会員となって下さい（会費滞納による退会者の再入会の場合も同様です）。
- ・高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」に参加される高校生（中学生含む）については、「みんなのジュニア生態学」の案内をご覧ください。
- ・非学会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆として参加できます。

大会参加費・懇親会費

- ・大会参加費・懇親会費は、学会費と別に納入していただきます。詳しくは、次号のニュースレターでお知らせします。
- ・学部生の参加を促進するために、大会参加費の大幅な割引もしくは無料化を検討中です。
- ・自由集会のみに聴衆として参加する場合には、大会参加費は不要です。

公開講演会

日本生態学会第20回公開講演会

講演会タイトル：「街のなかの多様な生き物と街を支える生態系」

日時：2017年3月18日（土）午後を予定

会場：早稲田大学大隈記念講堂

時間帯や内容の詳細については、次号のニュースレター等でお知らせします。

シンポジウムの企画案の公募

ESJ64では、大会シンポジウムの企画案を会員から募集します。大会の中心となる集会となりますので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。シンポジウムの開催時間は約3時間の予定です。大会シンポジウムの企画を希望される方は、2016年9月1日（木）17:00までに以下の内容をメールで esj_sympo@mail.esj.ne.jp までお送りください。

- ・提案者名（連絡窓口となる1名のみ。共同企画者は採択後に登録します。）
- ・提案者の連絡先メールアドレス（このアドレスに採択結果を通知します。）
- ・シンポジウムの仮題（プログラム原稿を作成する時点で変更可能です。）
- ・提案の内容（シーズ段階のものでも結構ですが、講演者・講演内容が決まっている場合はご記入下さい。海外からの招聘講演者を含める場合は必ずその旨お知らせください。）

【企画内容について】

- ・大会参加者は、毎年多様なテーマに関するシンポジウムが開催されるとともに、それまでにはなかった新鮮なテーマのシンポジウムが開催されることを期待しています。大会企画委員会は、シンポジウム企画経験の少ない方からの企画提案を歓迎します。
- ・主な講演者がおおよそ決まっている企画案をご提案ください。
- ・他分野との交流を深めるため、生態学会会員以外の方に招待講演をしていただくことも可能です。招待講演者

- の参加費は無料となります。
- ・若手研究者からも意欲的な提案を期待しています。

【英語使用について】

- ・日本生態学会では、留学生や海外からの研究者による大会参加が増えています。今後もさらに大会参加者どうしの研究交流が進むことを目指して、ESJ64では、シンポジウム・集会等における英語の使用（日本語との併用を含む）を奨励します。
- ・英語で開催されるシンポジウムは優先的に条件の良い部屋に割り付けます。
- ・日本語で開催されるシンポジウム・集会では、可能な範囲で、スライドでの英語の併記や簡単な英語版ハンドアウトの用意などの工夫をお願いします（ハンドアウトや二か国語スライド等は、英語開催のシンポジウム・集会において非英語話者の参加を促すのにも有効です）。
- ・ESJ64では、シンポジウムで講演する海外研究者のうち1名以上をEcological Research誌による招聘講演者として採用予定です。招聘講演者は旅費の支給を受ける事ができ、大会参加費も無料となります。大会後にシンポジウム内容に関連したレビュー論文もしくは特集論文などをEcological Research誌に投稿していただくことが原則となります。

【企画案の採用について】

- ・大会企画委員会は応募された企画案を検討し、大会全体のバランスに配慮して、採択する提案を決定します。
- ・採択された企画の提案者には企画者（オーガナイザー）としての参加を要請します。
- ・大会企画委員会はコーディネータを出して各シンポジウムの企画運営を支援し、シンポジウム間の調整を行います。
- ・企画案が多数寄せられ会場のキャパシティを超えてしまう場合や、内容的にシンポジウムとしての開催が難しいと判断される企画がある場合は、企画集会や自由集会として再提案していただくことがあります。

【応募の制限について】

- ・企画者は日本生態学会正会員に限ります。非会員は企画者（企画の責任者および連名の共同企画者を含む）になれません。
- ・異なるシンポジウム間で重複して企画者または講演者となることはできません（「講演者」は「講演の主たる説明者」を意味します。以下同様）。企画段階で重複が確認された場合には、コーディネータを通じて調整をお願いします。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は企画集会の企画者・講演者になることはできません。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えません。

企画集会と自由集会

ESJ64では企画集会と自由集会を募集します。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。企画集会・自由集会ともに、企画者は日本生態学会正会員である必要があります。企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断されるものについては、その限りではありません。

【企画集会】

- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・企画集会の企画者・講演者はシンポジウム及び他の企画集会の企画者・講演者となることはできません。
- ・企画集会の企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
- ・企画集会での講演者（主たる説明者）は原則、日本生態学会正会員に限定されます。非会員による講演は、特に事情があり企画提案時にその理由を記載した場合のみ、企画あたり1件まで認められます。ただし、同一の非会員が2年連続で、企画集会で講演することは認められません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えません。
- ・限られた会場を平等に分け合って使用するため、企画集会はできるだけ3人以上の講演者で構成して下さい。

【自由集会】

- 自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。
- 自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- 一般講演、シンポジウムなどとの重複発表は認められますが、原則として日程の調整は行いません。
- 大会の正式行事ではありませんので、会場は集会主催者が責任をもって管理して下さい。

【応募要領】

企画集会および自由集会の応募締め切りは、2016年11月1日（火）17:00です。現在、集会登録システムを新システムに移行中ですので、具体的な申し込み方法は次号のニュースレター、および大会ホームページでお知らせします。

【企画集会と自由集会の採否について】

- 企画集会は、自由集会に優先して採択されます。提案された集会（企画集会・自由集会）の数が会場の収容可能数を上回る場合には、全部の自由集会の開催を取りやめても会場が足りない場合にのみ抽選を行い、企画集会の採否を決定します。
- 自由集会の提案数が会場の収容可能数を上回る場合には、同一会員が重複して複数の集会（自由集会・企画集会）の企画者となっている自由集会を不採択とします。次に、大会シンポジウム企画者による自由集会を不採択とします。それでも数が多い場合には、抽選で自由集会の採否を決定します。
- 限られた場所と時間を分け合って使うため、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は自由集会の企画を可能なかぎりご遠慮下さい。2つ以上の自由集会の企画・講演もご遠慮下さい。
- 開催の可否については、締め切りの約2週間後にメールでご連絡します。

大会シンポジウム・企画集会・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	企画集会	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。大会の正式行事。	シンポジウムに次いで核となる集会。大会の正式行事。	様々な話題を自由に議論できる場。大会の正式行事ではありません。
開催時間	約3時間	約2時間	約2時間
開催の優先度	最優先されます。	シンポジウムの次に優先されます（自由集会の開催を全て取りやめても会場が足りない場合のみ、抽選で採否を決定します）。	優先されません（会場が足りない場合は抽選で採否を決定します）。
日程・時間	最優先されます（聴衆の集まりやすい日時に割り当てられます）。	シンポジウムの次に優先されます。	優先されません。
企画運営段階での企画委員会の関与	関与します。企画委員がコーディネータとして企画運営を支援します。内容の重複がみられる場合、複数のシンポジウムの合体を勧めることがあります。	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。
企画者の資格	正会員	正会員	正会員
非会員による講演	奨励します（審査の上、招待講演者として参加費を免除します）。	集会あたり1件まで可（同一非会員の2年連続は不可）。大会参加費を支払う必要があります。	認められます（自由集会での非会員講演者が大会の他行事に参加する場合には、大会参加費を支払う必要があります）。
海外からの招待講演者への学会からの旅費支給	大会全体で1名以上認められます。	なし。	なし。
一般講演との重複発表	不可	不可	可
他集会との重複発表	自由集会・フォーラムのみ可能。	自由集会・フォーラムのみ可能。	全て可能。
提案締切日	9/1（木）	11/1（火）	11/1（火）
概要登録 / 集会の概要及び講演者（主たる発表者及び共同発表者）と発表タイトルの登録締切日	11/1（火）	11/1（火）	11/1（火）
プログラムおよび要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	集会概要のみ掲載されます。

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複発表制限の対象となりません。

一般講演

- ・一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。
- ・発表内容に応じて会場・時間の割り振りをいたしますので、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきます。ESJ64における発表募集時の分野の区分については、現在、企画委員会で検討しており、決定次第ホームページでお知らせしますので適宜ホームページでご確認下さい。なお、応募状況に応じて募集時の区分は統廃合されますので、大会開催時の分野区分は募集時のそれと異なる可能性があります。予めご了承下さい。
- ・口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。また、英語による発表を集めた「英語口頭発表枠」を選ぶこともできます（発表内容に応じた分野分けも行います）。この場合は、下記の「英語口頭発表賞」にエントリーした発表と共にセッションを構成します。

注意：

- ・一般講演の演者は、日本生態学会の会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・1人で2つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承下さい。

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」

- ・日本生態学会は、生態学の社会への普及のため、アウトリーチ活動の一環として、高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を実施しています。第63回仙台大会では、学年末の多忙な時期にもかかわらず、3月21日（月）に40件の発表があり、最優秀賞、優秀賞などたくさんのポスターを表彰しました。引き続き、第64回東京大会でも高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を開催します。
- ・高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学諸分野の専門家や学生、他の参加校との交流を通して、生態学全般への関心をさらに高めていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。既に他の学会等で発表された研究の場合、そこからどのように発展したのかを含め、研究の集大成・経過報告としてご発表ください。参加費は無料です。
- ・第64回東京大会においても、高校生ポスター発表会に参加した高校生と若手研究者との交流会「みんなのジュニア生態学講座」を企画します（1時間30分程度）。第64回大会からは、先の大会で話題提供をした若手研究者がこの企画を順に運営する新体制になりました。2～3名の若手研究者に話題提供をお願いし、どのような中学・高校時代だったか、研究者を目指したきっかけは？等のエピソードも含めて、ご自身の研究を語ってもらいます。質問時間を十分に設けますので、ご期待ください。
- ・開催日時や参加申込み・要旨登録・授与される賞等の詳細については、次号のニュースレター／日本生態学会公式HP／全国規模のML等で配信しますので、ご確認下さい。また本企画について、ぜひお知り合いの高校教員や高校生にご紹介くださいますよう、よろしくお祈りします。

英語口頭発表賞

ESJ64では、第4回英語口頭発表賞を実施します。賞の目的は、大会における英語による研究発表を振興し、留学生や国外からの参加者との議論の場を、より多く作ることです。特に若手研究者のコミュニケーション能力と国際的情報発信力を高める機会を増やすことを重視しています。参加される方は、英語口頭発表賞ホームページを見て9月1日（木）までにメールで申し込んで下さい。また、賞に該当しない「非若手研究者」の方の一般講演も別途募集しますので、ふるってご参加ください。エブリワンちょっとした国際交流してみませんか？

Yo! チェケラ! Yo!

<https://sites.google.com/site/esj64engpresenaward/>

ポスター賞

ESJ64では、若手（学位未取得者）の研究を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター発表では、日本語を理解しない参加者への配慮を推奨します。ポスター賞の運営、応募資格、審査方法などについては、次号のニュースレターに掲載します。

エコカップ2017

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ2017が行われます。主催はエコカップ2017実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

第 63 回日本生態学会大会（仙台）開催報告

半谷吾郎（大会企画委員会 前委員長）

日本生態学会第 63 回大会は、2016 年 3 月 20 日から 24 日までの 5 日間、仙台市の仙台国際センター(21-24 日)および仙台市情報・産業プラザ(20 日)で開かれました。仙台の地で、札幌での第 58 回大会期間中に発生した東日本大震災当日のことを、改めて思い出した参加者も多かったのではないかと思います。わたしは、実行委員会との合同会議が仙台で開催された 8 月に、会議の合間を縫って石巻市の津波被災地まで行き、被害の大きさと、そこからの復興の様子を、自分の目で確認しました。今回の大会でも、「生態学から見た東日本大震災」と題した公開講演会を始め、震災に関する数多くの研究発表が行われました。あの日から 5 年経ち、震災の影響を生態学の視点から明らかにしようとする数多くの取り組みが行われていることに敬意を表すとともに、被災地である仙台市で開催されたこの大会が、成功裏に開催されたことを、参加者の皆さんとともにお祝いしたいと思います。

生態学会の大会は、担当地区会で組織される実行委員会と、学会の常設の委員会である大会企画委員会の両輪で運営されています。実行委員会は、会場・アルバイト・予算などの管理、懇親会、公開講演会の運営など、現地の実行部隊を担当し、企画委員会は、講演や各種集会の受付、賞の運営、プログラムの編集など、現地にいなくてもできる、毎回の大会で共通に行われる運営作業を担当します。今回の大会は、中静透大会会長、占部城太郎大会実行委員長をはじめとする実行委員会と、大会企画委員会の、合計 120 名あまりの会員によって、運営されました。

今回の大会は、参加者が 2396 名（うち参加費無料の学部学生 233 名、引率含む中学・高校生参加者 221 名、招待・招聘講演者 15 名、自由集会のみの参加者を含めず）、公開講演会の参加者約 500 名（うち非会員が 300 名）、一般講演は、2016 年 2 月 23 日までに申し出のあったキャンセルを除いた数字で、口頭発表 243 件（うち、英語口頭発表賞応募 51 件）、ポスター発表 909 件（うち、ポスター賞応募 482 件）、高校生ポスター発表 40 件、公式集会在 41 件（シンポジウム 4 件、企画集会 24 件、フォーラム 13 件）、非公式集会である自由集会在 37 件開催されました。昨年度から始まった、高校生と一般会員の交流の場である「みんなのジュニア生態学講座」では、3 人の若手研究者が、自身の大学入学前の思い出も交えて、生態学の魅力を、高校生ポスター発表を行った中学・高校生に語りました。また、生態学に関連する企業との交流会が、キャリア支援専門委員会主催のフォーラムとして開催されました。最先端の生態学研究の発表や各種会議はもちろん、次世代の生態学研究の育成、若手会員のキャリアパスの拡大まで、生態学に関わるありと

あらゆる取り組みが、この大会の中で行われています。発表される研究分野の多様性、大会の中で行われているさまざまな行事の多様性こそが、生態学会大会の大きな魅力です。

現在、生態学会では、運営改革が進行中です。これまで会員のボランティア、および事務局の手作業によって運営されていた、大会の講演等登録システムと会員管理システムを外部に委託します。すでに会員管理は 2016 年 4 月から新システムに移行しており、大会運営については、既存のシステムとできるだけ整合性を取りながら新システムに移行できるように、現大会企画委員長の川北篤さんを中心に、業者との折衝が行われています。会員のボランティアから外部委託に変更することで、新たな費用負担が発生するため、財政構造の見直しも同時に行わなければいけません。外部委託だけでは運営の負担は軽減しませんので、大会のあり方そのものを見直す作業も、同時進行中です。次回東京大会の総会で皆さんの承認を得、次々回の 2018 年札幌大会から実施することを目指して、議論が行われています。そのような「痛み」を伴ってでも運営改革を実施するのは、外部委託によってより効率的な運営を目指すことに加え、特定の会員のボランティアに過度に依存する体制は、健全でも持続可能でもないからです。改革の経緯や趣旨についての詳細な説明は、学会ホームページの運営改革の項目 (http://www.esj.ne.jp/esj/Unei_kaikaku/index.html)、2016 年 4 月 8 日更新の齊藤隆前会長のメッセージ (<http://www.esj.ne.jp/esj/message/no0419.html>)、36 号ニューズレターで吉田丈人さん（大会あり方検討部会座長）が執筆された「第 62 回日本生態学会大会（鹿児島）開催報告」などにまとめられていますので、ぜひお読みください。

運営改革は、個々の会員のボランティア作業と、財政負担をできるだけ減らしながら、魅力的な大会を開催する、魅力的な生態学会を作るために行うものです。そのためには、何を魅力的と考えるかについて、会員の皆さんの考えを知ることが、第一に必要です。今年、執行部によって、会員の皆さんの意見を集約するアンケートが、何回かにわたって実施される予定です。ぜひみなさんのお知恵を貸してください。

運営改革を実施していくにあたり、仙台大会を準備してきた立場として、大会に関して、会員の皆さんひとりひとりに考えていただきたいことが、3 つあります。

各種集会の位置づけ

ひとつは、各種集会、とくに自由集会の位置づけについてです。生態学会の集会には、シンポジウム、企画集会、フォーラム、自由集会と、4 つも種類があります。大会案内を一読しただけで、その違いを理解するのは困難で

しょうし、ひょっとしたら集会の提案をあきらめてしまった会員もいたかもしれません。複雑な集会の区分の見直しは、大会運営改革で、もっとも集中的に議論されている項目のひとつです。

4つの集会の中で、もっとも生態学会らしいのが、自由集会でしょう。自由集会是非公式行事であって、何をやってもよく、非会員も講演できるし、自由集会だけの参加なら参加費もいらない、講演者も講演タイトルも講演要旨も登録しない、その名の通り自由な集会です。自由集会は、参加者（企画者）からみれば、登録の手間が最小限で済み、「大会参加費がかからないから」ということで、気楽に講演者や聴衆を呼べる、実に「魅力的」な集会です。一方、運営する側からの評価は逆です。たとえ非公式集会でも、運営に一定の努力を必要とし、生態学会の名前で借り上げている会場に出入りする人について、学会が責任を負う立場にあることにはかわりありません。にもかかわらず、自由集会のみ参加者には、大会参加費という形での、応分の負担は期待できません。このように、個々の会員の利益と、学会全体としての利益が、自由集会については相反している側面があります。ただし、大急ぎで補足すると、自由集会という存在を生態学会の大会の魅力と感じ、自由集会があるがゆえに大会に参加している会員が多数いるならば、学会と会員個人の間で、利害は一致します。

大会の公式行事としての研究集会には、シンポジウムと企画集会があります。シンポジウムでは、Ecological Research編集部と協力して、国際的に優れた業績をあげている海外の研究者を、学会の費用で招聘して講演してもらうことができます。開催時間が3時間と長いなどの優遇措置がある代わりに、ほかの集会よりも早く、仙台大会の場合は8月27日までに提案を提出していただき、企画委員会とのやり取りを通じて企画案を確定していきます。企画集会は、シンポジウムはハードルが高いと感じている会員にも、公式集会として集会を企画してもらうために、2008年の第55回大会（福岡）から設けられたカテゴリーです。提案の締め切りは一般講演や自由集会と同じ日ですが、自由集会と異なり、個々の講演の講演者や要旨を登録していただく必要があります。なお、フォーラムは、これら研究に関する集会とは別に、学会執行部や委員会が、生態学に関するさまざまな問題を議論する集会です。

仙台大会では、シンポジウムの企画が4件しかありませんでした。最近の大会では、EAFESとの合同大会であった第59回（大津）大会を除くと、16、13、17、12件のシンポジウムが開催されており、大きな減少であることがわかります。シンポジウムの提案が激減した理由は、現在、企画委員会で分析中ですが、ひとつの可能性として、シンポジウムは企画提案の締め切りが早く、その後も企画委員会とさまざまな煩雑なやり取りがあり、集会を開催しようとする会員に忌避されたのではないかと考えてられます。シンポジウムの中には、学会から旅費を支給して講演者を招聘するものもあるため、最低限のやりとりは必要ですが、今後は手続きの簡素化を目指したいと思います。

学会の費用を使って、日本生態学会会員だけではカバーしきれない研究分野・対象について、海外の著名研究者を巻き込んだ議論ができることは、提案者にとっても聴衆としても、大会の大きな魅力になりうるはずです。招聘研究者には、企画者と協力してシンポジウムでの議論の内容をもとにEcological Researchに総説や特集など何らかの記録の執筆をお願いしています。大会とEcological Researchの相乗効果で、日本生態学会会員の研究成果の国際プレゼンスを高めることができるはずです。現在の生態学会では、科研費（国際情報発信強化）を通じて、これらの取り組みを支援する体制が整っています。会員の皆さんには、ぜひこれを利用して、次回大会では魅力あるシンポジウムを多数提案していただきたいと思います。

一方で、仙台大会での自由集会の提案は44件もあり、これは近年の大会での開催数（過去5回の大会で、29-36件）を大きく上回っていました。結果として、予定していた会場にすべての集会を収めることができず、「会場が足りない場合は、企画集会と提案者が重複している自由集会の開催をお断りする」という大会案内の記載にしたがって、6件の自由集会の開催をお断りし、さらに登録内容が不備だった1件の自由集会の開催をお断りしました。「自由集会は採択されないことがある」というのは、これまでずっと大会案内に明記されていましたが、実際に開催をお断りしなくてはならなくなったのは、今回が初めての事態です。

会員の皆さんには、改めて、自由集会是非公式集会である、ということをご認識していただきたいと思います。非公式集会だというのは、今回のように開催は断られることもあるということであり、その開催のための費用や手間は、自由集会以外の公式行事に（も）参加する、大会参加費を支払った人の参加費で賄われている、ということ。自由集会を提案しようとする前に、シンポジウムや企画集会としての開催は可能か、一度検討してみてください。一方で、お金のことは別に、ほかの集会のカテゴリーには収まらない、まさに自由集会でなければできない種類の集会があるのも確かです（功労賞受賞あいさつで粕谷英一さんが紹介されていた、1991年の38回大会で行われたという人形劇の自由集会、見てみたいものです）。会員の皆さんが自由集会の魅力をどのようにとらえているのか、アンケートなどを通じて意見をお寄せいただきたく、お願い申し上げます。

英語化の推進

皆さんにお考えいただきたい2点目は、英語化の推進です。

今回の大会では、英語で開催された集会が2件あったほか、英語口頭発表賞応募者による英語での口頭発表セッションが5つの分野にわたって生まれ、結果として、総会・授賞式・受賞講演のあった23日、および夜の時間帯を除く、すべての時間帯で英語での発表が行われているように、プログラムを編成することができました。とくに、今回で3回目となる英語口頭発表賞は、これまで43人、30人であった応募者が51人にまで増えました。

これは、おもに日本人学生の申し込みが増えたことによるものです。

これらの英語化を実現するために、さまざまな運営の努力が行われています。英語口頭発表賞は、企画委員会の中の9人の委員が部会を組織して運営に当たっています。大会案内はホームページ上で英語でも発行されており、講演・集会申し込みサイトやプログラムの主要部分は日英の併記になっています。入会については、これまでは海外からは事務局にファックスを送るというアナログな方法によるしかありませんでしたが、外部委託によって、これからはクレジットカードを利用した、オンラインでの手軽な方式が利用できるようになります。今後、日本語を理解しない参加者への配慮として、会場内の掲示、懇親会でのメニュー表示、多言語での受付や託児対応といったことまで、考えていかなければいけないかもしれません。

ただ、会員の中には、そこまでのコストをかけてまで、英語化を推進する意義はあるのかという疑問、そもそも日本国内で行う研究集会は、円滑な意思疎通のために日本語だけで行くべきである、というご意見をお持ちの方もいるでしょう。母語が日本語である研究者同士のコミュニケーションは、日本語で行ったほうがはるかに効率的であるのは確かです。一方、自然科学の世界で、英語で情報発信を行っていく必要性は、厳然として存在しています。自然科学での言語使用の問題は、常にこのふたつの相反する必要性のバランスの問題に帰着します。その上で、日本生態学会の大会で、英語化を推進することの意味は、二つあるとわたしは考えます。

ひとつは、生態学研究が日本語話者だけでは行われていない以上、ある研究テーマを展開していったときに、非日本語話者を含んだ議論が必要になるのは当然のことです。通常は海外で開催される国際学会に出席しなければ体験できない、そのような国境を越えた議論が、日本国内で行われるならば、それは生態学会大会のひとつの大きな魅力になるはずですが、本稿の中でもすでに述べたように、生態学会では、そのような会員の取り組みを支援する財政基盤がありません。

もうひとつは、言語的少数者への配慮です。日本の生態学は、日本語話者だけで行われているわけではありません。国内の大学の生態学の研究室には、少なからぬ数の留学生が在籍しているはずですが、そういう留学生を大会の場で見かけることは、多くないようにわたしには感じられます。多数者には見えない、少数者にとっての障壁を取り除き、誰もが参加できる多様性に富む社会を作ること、それが実現しているかはさておき、その必要性は、現代の日本では多くの賛同を得られることだと思います。大会での言語的少数者への配慮も同様に考えなくてはならないと、わたしは考えます。

「誰もが参加できる多様性に富む社会」は、日本生態学会大会という場において、多数者である日本語話者にも利益があります。日本語話者と同じ日本の生物を、日本の身近な場所で研究している人の発表は、たとえ英語であっても自身の研究の参考になるでしょう。また、その留学生が、研究室の外にも広がる日本の生態学者の

コミュニティへ、大会を通じて、人間関係のネットワークを広げることができれば、その留学生が帰国したときに、日本とその国の生態学の双方にとって、大きな利益があるはずですが。

留学生の参加の妨げになっているのは、まさにほとんどの発表が日本語で行われていて、発表を聞く側としての魅力が少ないことでしょう。ここで必要なのは、英語化というよりは、バイリンガル化です。ポスター発表では、英語のハンドアウトを用意したり、タイトルは日英併記にして非日本語話者の目にもとまるようにして、聴衆によって説明する言語を使い分けることは容易です。現在でも、非日本語話者への配慮のあるポスターを、ポスター賞の審査で優遇することは行われていますが、現状ではバイリンガルポスターは、まだそれほど浸透していません。プログラム上での講演タイトルの日英併記など、ハードの面で改善の余地はありますが、個々の会員が、できるところから発表のバイリンガル化に取り組むことで、日本語による円滑なコミュニケーションの利点を失うことなく、言語的少数者にも魅力ある大会となれば、理想的です。

企画委員会委員の後継者確保

第3に考えていただきたいことは、この膨大な作業を必要とする大会運営が、会員のボランティアによって賄われているということです。大会参加者が2000人で、現状で100名以上が実行委員会・企画委員会に所属しているということは、およそ大会参加者の5%が、運営を担っている、ということです。私自身生態学会の大会に初めて参加して約20年になりますが、そのあいだに1回くらいは運営に携わらなければ、負担を平等に引き受けている、とはいえない計算になります。実際には学生の間だけで退会する人、非会員の参加者も多いでしょうから、10年に1回くらい、というのが妥当なところかもしれません。

大会運営の仕事がたいへんである、という情報が出回っているのか、自分の後任を探すのがたいへんだという話を、企画委員の方からよく聞きます。結局は知り合いのついでで探すしかないの、出身研究室の先輩から後輩へ順繰りに回していく、という状況が生まれています。これは負担の配分という点で公平な運営ではありませんし、多様なバックグラウンドの研究者の意見を大会運営に取り入れるという点で、健全な運営でもありません。運営改革の議論の中で、ポスドクの方に企画委員を引き受けていただき、その分大会参加費を免除する、という案も検討されています。ほかの委員会で行われている、委員の公募も検討に値するでしょう。現状では現任の企画委員に声をかけていただくこととなりますので、興味のある方は、わたしや、仙台大会のプログラムの中に名前が挙がっている知り合いの委員に、ぜひメールでお知らせください（新しい会員管理システムでは、会員の連絡先を検索できます）。

大会運営の仕事は、もちろんたいへんなのはその通りなのですが、たいへんやりがいのある仕事でもあります。私はサルの研究をしています、過去の大会で、圧

倒的に多様な生物種の大海の中に、ひとりぼつんというような気分を味わったことが、何度かあります（わたしの出身研究室の、在学中の先輩後輩たちは、最近も誰も生態学会大会に出席していません）。そのようなわたしが、企画委員会で、さまざまな生物をいろいろな手法で研究している人たちと知り合い、とても効率的で風通しのよい議論をし、大会という、目に見える魅力的な行事を、チームで作りに上げたことは、とても楽しい貴重な経験でした。齊藤前会長が仙台大会での総会第2部で、「戦友」という言葉を使っていました。その言葉に、全面的に賛同します。

運営にかける献身的な努力を強調することは、新規の引き受け手を躊躇させるかもしれません。運営の省力化は、引き続き進めていきます。ぜひ多くの方に、企画委員会のメンバーとして、手を上げていただくよう、願います。

運営改革の議論と平行して、次回早稲田大学で開催される第64回大会の準備が、小泉博大会会長、関川清広大会実行委員長、川北篤大会企画委員長のもと、着実に進められています。仙台大会終了直後から、本ニュースレターに掲載する大会案内第1号の内容を確定するために、活発な意見交換が行われました。この大会が、講演等登録システムを、初めて業者委託する大会となります。できるだけこれまでのスケジュールを守り、スムーズに移行が行われるよう、企画委員会としても最善を尽くしますが、予期せぬトラブルや、締め切りの前倒しが行われる可能性も捨て切れません。会員の皆さんには、大会案内や、学会から配信される案内メールの内容をよくご確認いただき、これまで通り締め切り厳守でのお申し込みを、よろしく願います。東京大会が、仙台大会にも増して盛会となることをお祈りします。

最後になりましたが、今大会の運営に当たりお世話になった、以下の方々に厚くお礼を申し上げます。

占部城太郎さんをはじめとする大会実行委員の皆さま、辻野亮さん（運営部会長）、柴田銃江さん（シンポジウム部会長）、内海俊介さん（ポスター部会長）、西脇亜也さん（高校生ポスター部会長）、牧野能士さん（発表編成部会長）、三木健さん（英語口頭発表賞部会長）

をはじめとする大会企画委員の皆さま、学会執行部、事務局の皆さま

高校生ポスター賞、英語口頭発表賞に副賞を寄贈して下さった共立出版株式会社、およびシュプリンガー・ジャパン株式会社

ポスター賞を審査して下さった以下の方々：伊藤健二、角田裕志、高木俊、池田透、下野綾子、早坂大亮、下地博之、青井悠太、岡田賢祐、坂本佳子、熊野了州、山口幸、佐藤一憲、木下智章、宮国泰史、岡野淳一、都野展子、古市生、山本誉士、本間淳、片山昇、岩崎貴也、伊藤洋、長谷和子、柳真一、石川麻乃、瀧本岳、杉山杏奈、小池伸介、塩尻かおり、中澤剛史、角田智詞、小川一治、上村真由子、谷友和、鈴木祥弘、小山里奈、梅林利弘、半場祐子、南野亮子、矢崎健一、清水英幸、兼子伸吾、阿部晴恵、松橋彩衣子、八木橋勉、鳥丸猛、名波哲、三浦彩、斎藤琢、市橋隆自、近藤美由紀、上田実希、福島慶太郎、片山歩美、曾我部篤、小山明日香、吉山浩平、竹中明夫、吉川徹朗、高田宜武、熊谷直喜、今藤夏子、富田啓介、藤井直紀、須貝杏子、松村俊和、西嶋翔太、亀山哲、深町加津枝、石山信雄、長太伸章、大谷洋介、北西滋、竹内やよい、丹羽慈、河内香織、奥崎穰、中川光、酒井陽一郎、吉田智弘、笹木義雄、小池文人、森本淳子、野間直彦、伊藤健彦、明石信廣、齋藤智之、横川昌史、鈴木智之、井田秀行、若松伸彦（敬称略）、ほか、匿名を希望された14名の方

高校生ポスター賞を審査して下さった以下の方々：嶋田正和、高原輝彦、丑丸敦史、土居秀幸、栗和田隆、中井咲織、小口理一、深沢遊、三宅崇、平山大輔、中田兼介、白川勝信、宮田理恵、広瀬祐司、児玉紗希江、門脇浩明、持田浩治、遠山弘法、工藤岳、永光輝義（敬称略）、ほか、匿名を希望された1名の方

英語口頭発表賞を審査して下さった以下の方々：田中健太、韓慶民、辻和希、杉浦真治、日室千尋、Richard Shefferson、Masami Fujiwara、三木健、久米朋宣、藤井一至、Benjamin L. Turner、瀧本岳、岸本圭子、池田紘士、鏡味麻衣子、大橋瑞江（敬称略）、ほか、匿名を希望された1名の方

記 事

I. 一般社団法人日本生態学会平成 28 年度定時総会（第 63 回大会会員総会、2016 年 3 月 23 日、代議員 19 名・委任状提出代議員 2 名・会員約 120 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 2015 年度学会誌発行状況・会員数等

日本生態学会誌 65 巻

	1 号	2 号	3 号
発行部数	2710	2740	2700
配本部数	2687	2678	2682
残部数	23	62	18

保全生態学研究 20 巻

	1 号	2 号
発行部数	1400	1400
配本部数	1376	1388
残部数	24	12

Ecological Research Vol.30

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	2400	2400	2350	2360	2380	2420
配本部数	2369	2390	2349	2358	2356	2367
残部数	31	10	1	2	24	53

配本内訳

	日本生態学会誌 65 巻 3 号		Ecological Research Vol.30 No.6		保全生態学研究 20 巻 2 号	
	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数
一般会員	1988	52	1792	49	945	23
学生会員	470	56	435	51	271	27
賛助会員	96	1	96	1	22	0
小計	2554	109	2323	101	1238	50
名誉会員	3	0	3	0	3	0
寄贈交換	54	0	41	0	52	0
購読	71	0	0	0	95	36
小計	128	0	44	0	150	36
合計	2682	109	2367	101	1388	86

会員数 ※ 2014 年より ABC 会員廃止

	2014 年 12 月末現在			2015 年 12 月末現在		
	一般	学生	合計	一般	学生	合計
北海道	250	128	378	243	124	367
東北	172	82	254	169	78	247
関東	1027	331	1358	985	314	1299
中部	393	130	523	393	129	522
近畿	452	244	696	453	269	722
中四国	207	68	275	204	71	275
九州	225	71	296	231	76	307
外国	39	0	39	29	26	55
小計	2765	1054	3819	2707	1087	3794
賛助（旧団体）			100			96
名誉			4			3
小計			104			99
合計			3923			3893

会費納入率（各年 12 月末現在）

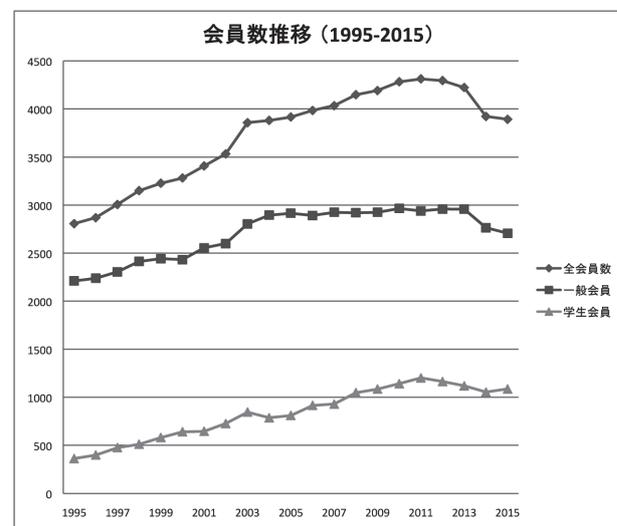
	2014 年		2015 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	92.0	74.2	91.8	75.0
東北	90.1	70.7	91.1	70.5
関東	90.5	72.1	92.4	71.3
中部	90.6	74.6	92.1	70.5
近畿	95.4	79.0	93.2	81.0
中四国	92.3	75.0	90.7	67.6
九州	92.4	78.9	90.0	86.8
平均率	91.9	74.9	91.6	74.7

雑誌不要者数変遷（各年 12 月末）

	一般					学生				
	会員数	生態誌不要	ER 不要	会員数	生態誌不要	ER 不要				
2008	2725	107	4%	146	5%	1021	80	8%	85	8%
2009	2740	171	6%	215	8%	1061	148	14%	157	15%
2010	2582	321	12%	419	16%	952	221	23%	239	25%
2011	2738	371	14%	478	17%	1175	339	29%	364	31%
2012	2760	478	17%	606	22%	1135	407	36%	431	38%
2013	2757	531	19%	679	25%	1097	477	43%	501	46%
2014	2765	614	22%	789	29%	1054	495	47%	528	50%
2015	2707	623	23%	811	30%	1069	522	49%	563	53%
2016	2585	664	26%	874	34%	1150	577	50%	616	54%

※ 2013 年までは AB 会員数

1/26
現在



b. 庶務報告（2015 年 4 月～2016 年 3 月）

- 日本学術振興会より平成 27 年度科研費（公開講演会）について内定通知があった。交付額は 1,400,000 円（4 月 1 日）
- 日本学術振興会より平成 27 年度科研費（国際情報発信強化 A）の内定通知があった（H25 年度より 5 年間交付、H27 年度 17,600,000 円）（4 月 1 日）
- 法務局に平成 27 年度第 1 回定時総会にて就任した理事・監事交代を申請し登記された（4 月 24 日）
- 文部科学省へ平成 26 年度科研費（国際情報発信強化 A）実績報告書を送付した（5 月 11 日）
- JST（科学技術振興機構）の J-stage 説明会に参加した（5 月 17 日）

6. 今後の学会体制を踏まえて国際文献社と打ち合わせをした(5月28日)
 7. 第18回生態学琵琶湖賞運営委員会において謝志豪氏(国立台湾大学)の受賞が決定された(6月9日)
 8. 第18回生態学琵琶湖賞授賞式および受賞講演を琵琶湖博物館にて行った(7月18日)
 9. Ecological Researchの2016年～2021年の出版に関する覚書をシュプリンガー・ジャパン株式会社と交わした(7月23日)
 10. 会員へ選挙関連書類および2016年会費請求書を送付した(9月30日)
 11. (株)国際文献社と個人情報の取扱いに関する覚書を取り交わした(10月2日)
 12. 次々期会長候補および次期代議員選挙の開票を事務局にて行った(11月4日)
 13. 「日本生態学会誌」「保全生態学研究」のJ-stateサービス利用申込を行い、2誌ともに掲載誌として採択された(11月9日)
 14. 学術振興会に平成28年度科研費(研究成果公開發表)計画調査など応募書類一式を送付した。(11月11日)
 15. 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞・奨励賞(鈴木賞)候補者が代議員会にて承認された(11月29日)
 16. 国際文献社にて会員管理業務引き継ぎの打ち合わせを行った(12月11日)
 17. 東北地区選出の松木佐和子代議員より産休・育休のため辞任したいとの申し出がありメールによる代議員総会にて全会一致で承認された。これにより、東北地区選出の代議員は次点の鈴木まほろ氏が就任した。(1月12日)
 18. 可知理事・岡部理事・久米理事の3名が平成27年度科研費(国際情報発信強化A)中間評価におけるヒアリングに出席した(2月16日)
 19. (株)国際文献社と会員管理業務に関する契約を交わした(2月26日)
- 他、各種集会へ後援・協賛名義使用承認11件、論文図表等の転載3件。
- c. 会計報告(2015年4月～2016年3月)**
1. シュプリンガー社より2014年度売上還元金として1,650,000円及び2015年度ER編集事務費用2,000,000円の入金があった(4月27日)
 2. シュプリンガーへ2015年1・2号分の出版費として4,968,000円を支払った(5月15日)科研費(国際情報発信力強化)前期分として10,000,000円の入金があった(7月10日)
 3. 科研費(研究成果公開)として1,400,000円の入金があった(7月10日)
 4. 科研費(国際情報発信力強化)後期分として7,600,000円の入金があった(10月30日)
 5. 東京化学同人より「生態学入門2版」印税として543,480円が振り込まれた(8月25日)
 6. 土倉事務所へ保全生態学研究20-1印刷費として945,000円を支払った(9月1日)
 7. 土倉事務所へニュースレターNo.36印刷費として364,500円を支払った(9月1日)
 8. 土倉事務所へ日本生態学会誌65-1印刷費として907,308円を支払った(9月1日)
 9. 土倉事務所へ日本生態学会誌65-2印刷費として1,509,192円を支払った(9月1日)
 10. 土倉事務所へ選挙関連書類印刷費として250,592円を支払った(10月23日)
 11. 土倉事務所へニュースレターNo.37印刷費として267,300円を支払った(10月23日)
 12. シュプリンガー・ジャパン社へEcological Research編集委託費として10,011,060円を支払った(12月14日)
 13. 2015年度INTECOL年会費として466,735円を支払った(12月18日)
 14. 土倉事務所へ日本生態学会誌65-3印刷費として1,239,300円を支払った(12月28日)
 15. 土倉事務所へ保全生態学研究20-2印刷費として982,800円を支払った(12月28日)
 16. テコラス(株)へサーバ年間利用料として409,320円を支払った(1月28日)
 17. 2015年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。(2月10日)
- 2. 大会企画委員会**
- a. 仙台大会一般講演・各種集会開催状況**
- 一般講演・ポスター発表 909(うち賞応募482)>> 昨年866(402)
- 一般講演・口頭発表 243(うち英語口頭発表賞応募56)>> 昨年166(30)
- 高校生ポスター発表 40>> 昨年29
- シンポジウム4件(うち英語1)>> 昨年12(5)
- 企画集会24件(うち英語1)>> 昨年19(0)
- フォーラム13>> 昨年11
- 自由集会37>> 昨年29
- ・シンポジウムの提案が激減し、自由集会の提案が大きく増加した。会場数が不足したため、提案された自由集会のうち企画集会と企画者が重複していた6件について、開催をお断りした。開催をお断りしたのは、日本生態学会大会としては初めてのこと。大会参加費を支払わなくても参加できる、非公式行事の自由集会が増加し、本来大会の目玉行事であるはずのシンポジウムが少なくなったことは、大会運営上問題であるため、原因分析を進める必要がある。
- b. 大会運営の改革**
- ・東京大会から、国際文献社に大会運営を委託する。企画委員会から専任の窓口(東京農工大学・小池伸介氏)を置いて、従来のシステムからの移行がスムーズに行くように準備を行う。5月以降に新しい大会登録システムのテストを行う。新システムの技術的な事情が原因で、申し込みのスケジュールも見直す必要があるため、会員への丁寧な周知が必要。
 - ・集会系企画の組み替えを中心とした大会運営の改革に関する意見大会あり方検討部に提出。北海道大会以降の実施を目指して、改革の方向性の取りまとめは大

会あり方検討部会に一任した。

(文責：半谷吾郎)

3. Ecological Research 刊行協議会

日時：2016年3月20日(日) 14:00 - 16:00

場所：仙台市情報・産業プラザ(仙台駅前 AER 5F) 会議室 2(B)

出席者：久米篤(Editor-in-Chief)、仲岡雅裕(Deputy EiC)、鈴木準一郎(Managing Editor) 福井学、井鷲裕司、三木健、大手信人、小野田雄介、大塚俊之、齊藤隆、陀安一郎、富松裕、辻和希、露崎史朗、山浦悠一(以上 Associate EiC) 半谷吾郎(次期 AEiC) 野田隆史、金子信博(以上 前 AEiC) 半場祐子、飯島勇人、菊沢喜八郎、北村俊平、木庭啓介、工藤岳、牧野渡、小林真、松崎慎一郎、村岡裕由、中路達郎、大橋瑞江、陶山佳久、山尾僚(以上 Editor) 角田智詞、岡田慶一(以上 Copy Editor)、奥崎穰(次期 ME)、岡部貴美子(幹事長)、山口芙美子、平口愛子(以上 シュプリンガー・ジャパン)、青島裕子(EC)

議題：

a. 事務局報告

- ・編集状況について
- ・編集委員の交代について
- ・出版社報告(シュプリンガー・ジャパン社より)

b. Ecological Research Paper Award 2015 受賞論文(全5編)

- ・1号1-2ページ, 筆頭著者 Rieko Urakawa, 論文題名 Biogeochemical nitrogen properties of forest soils in the Japanese archipelago
- ・1号93-100ページ, 筆頭著者 Kenji Matsuura, 論文題名 Antifungal activity of a termite queen pheromone against egg-mimicking termite ball fungi
- ・1号133-143ページ, 筆頭著者 Antonio Gonzalez-Rodriguez, 論文題名 Relationships among plant genetics, phytochemistry and herbivory patterns in Quercus castanea across a fragmented landscape
- ・3号517-525ページ, 筆頭著者 Noboru Fujita, 論文題名 Capitulum and rosette leaf avoidance from grazing by large herbivores in Taraxacum
- ・4号563-572ページ, 筆頭著者 Yukiko Senga, 論文題名 Variation in microbial function through soil depth profiles in the Kushiro Wetland, northeastern Hokkaido, Japan

c. 科研費申請「国際発信力強化」について

d. 編集体制の変更について(副編集長制, 複数 ME 体制)

e. Data paper の規定の見直し

f. Publons、ORCID について

g. 査読者表彰について

h. Ecological Research セミナーについて

i. パーチャルイシュー、特集号、総説などの企画

j. ER 誌 30 周年記念企画

k. その他

(文責：久米篤)

4. 日本生態学会誌刊行協議会

日時：2016年3月20日(日)

出席者：古賀庸憲、伊東明、北出理、村岡裕由、永光輝、中川弥智子、岡野隆宏、今藤夏子、高田宜武、三宅崇、大澤剛士、草刈秀紀(オブザーバー)

a. 報告事項

①出版状況

i) 投稿、審査状況(2016年3月18日現在)

年	原著 受付	総説 受付	原著・総説			特集			学術 情報	連載
			受理	却下	審査中	受付	受理	審査中		
2016	2	1	0	0	3	3 (18編)	0	3 (18)	0	2
2015	4	5	5	3	1	7 (50編)	4 (28)	3 (22)	2 (11編)	5
2014	6	4	5	2	3	5 (27編)	5 (27)	0	2	5

ii) 刊行状況

65巻(2015年)刊行状況

号	原著	総説	特集	学術 情報	連載	その他・ 記事	合計	頁数
1	0	2	1 (5編)	0	1	1	9	75
2	1	1	2 (11編)	0	1	0	15	133
3	2	2	1 (5編)	0	2	2	13	104
計	3	5	4 (21編)	0	4	3	37	312

②検討事項

- 1) 新連載企画(案)「地球環境問題と環境行政50年～生態学(者)が果たしてきた役割～」
- 2) 電子体の掲載について
今年の発刊号から J-Stage へ移行。
今後、出版社への委託も検討する。
- 3) 学術情報特集について
投稿規定の記事区分に入れるか今後検討していく
査読の有無がわかるような表記を検討する

(文責：古賀庸憲)

5. 保全生態学研究刊行協議会

日時：2016年3月20日 11:45 ~ 13:45

出席者：(編集委員) 長谷川、角野、西廣、倉本、中越、湯本、横溝、細、山本、小池(編集事務局) 橋口

a. 報告事項

2015年投稿・編集状況

	原著	総説	調査 報告	実践 報告	解説	保全 情報	意見・ 他	合計
新規投稿	24	1	11	0	1	4	3	44
受理	13	0	7	0	0	3	1	24
却下・取下	1	1	1	0	0	1	0	4
審査中	10	0	3	0	1	0	0	16

	原著	総説	調査報告	実践報告	解説	保全情報	意見・他	合計
植物	9	0	3	0	1	2	1	16
動物	10	0	7	0	0	1	0	18
植物・動物	2	0	1	0	0	1	0	4
その他	3	1	0	0	0	0	2	6
投稿総数	24	1	11	0	1	4	3	44

2014年新規投稿数26編：受理14編，却下・取り下げ12編
 2013年新規投稿数34編：受理20編，却下・取り下げ14編
 2012年新規投稿数28編：受理21編，却下・取り下げ7編

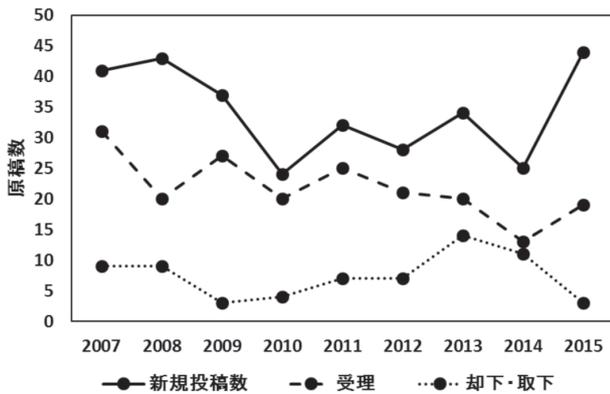
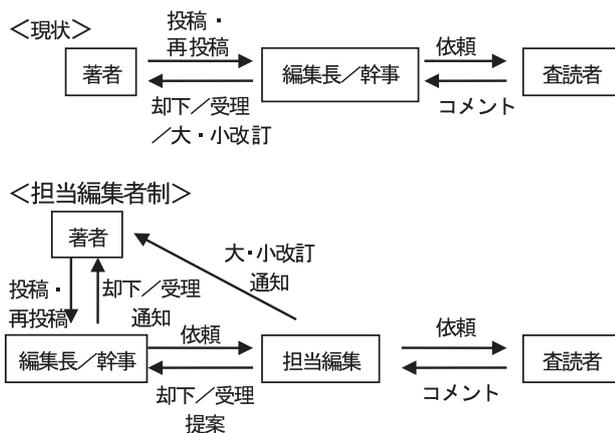


図 保全生態学研究への新規に投稿された論文数、受理された論文数、却下・取下げとなった論文数の推移。原著論文、総説・解説、調査報告、実践報告、保全情報の総計を示す。

b. 審議事項

①担当編集者制について

現状では原則としてすべての投稿を編集長あるいは編集幹事がハンドリングしているが、投稿数増加への対応として、担当編集者制に移行する方針とした。ただしその前提として「編集ガイドライン」を明文化し、判断基準をなるべく統一することとした。あわせて査読ガイドライン、執筆者ガイドラインの整備を検討することとした。



②特集について

仙台大会から、日本生態学会誌と調整の上、保全生態学と関連の深い集会企画者に特集を提案することにした

(6集会に提案済み)。また、特集の提案は随時受け付けていることを、ウェブページ等で公表することとした。

特集の掲載記事も通常の記事と同様の過程で審査することを確認した。各特集には担当編集者を設けて進めることとした。

③PDF無料公開のタイミングについて

現在、保全生態学研究はCiNiiのサイトにおいて出版後2年までは「定額アクセス可能」(会員0円、非会員378円/論文、PPV864円/論文)、2年後からは「オープンアクセス」としている。しかし2016年3月のCiNiiのサービス終了に伴い移行するJ-Stageでは、定額アクセス期間の設定はできない。また会費制度の見直しの議論も開始されているという情報もある。

刊行協議会として議論した結果、以下の意見が合意された。

- ・今後、保全誌購読者の会費・会員区分における扱いを生態学会誌と統一することを検討して欲しい。
- 保全生態学研究の発行・公開について検討すべき選択肢
- ・オンラインジャーナル化して即時公開する。紙媒体は廃止する。
- ・現在の日本生態学会誌と同様に、出版後にPDFは即時公開し、紙媒体は存続させる。
- ・一部の論文のPDFのみ即時PDF公開し、それ以外は一定期間後に公開する。
- ・掲載料を設定する。

(文責：長谷川雅美)

6. 自然保護専門委員会

日時：2016年3月20日(日) 11:45～13:45 場所：仙台市情報・産業プラザ(会議室2(A))

出席委員：現委員16名：露崎、紺野、川上、吉田、和田、野間、井上、増澤、加藤、清水、横畑、阿部、竹中、村上、井田、須賀

a. 審議および承認事項

- ① 2015年度活動費支出(1～12月)報告および2016年度活動費予算
 2015年度活動費30,710円
 2016年度予算125,000円(フォーラム講師旅費およびアフターケア活動費)
- ② 新委員の選任(地区選出委員および専門別委員)
 九州・沖縄地区選出：内貴章世 環境法担当：神山智美 MAB担当：水谷瑞希
 鳥獣管理担当：常田邦彦
- ③ 次期役員選出 委員長：吉田正人 副委員長：和田直也 幹事：須賀丈

b. 報告事項

● 要望書提出

- (1) 近畿地方最後のアユモドキ繁殖地にスタジアム計画「京都府亀岡市アユモドキ生息地での専用球技場建設計画の再考を求める要望書」<総会決議>(2015/3/20) 京都府知事、亀岡市長宛
- (2) 日本で最も高い魚類多様性を誇る河川：浦内川に取水計画「沖縄県西表島浦内川の取水施設建設計画の再

考を求める要望書」〈自然保護専門委員会より環境大臣、竹富町長宛提出〉(2015/7/6)

●要望書提出の効果

「中池見湿地への新幹線敷設計画に対して、新たな環境影響評価調査を求める要望書」〈日本生態学会より〉(2013/3 提出) 2015 年 5 月、要望書の提案を受けて、北陸新幹線ルートを一環ルートに戻すことを事業者が決定

表 1. 生態学会がこれまでに提出した要望書とその効果

年	要望書	採択	効果	現状
2015	西表島浦内川の取水計画の中止	委員会	?	係争中
	亀岡市アユモドキ生息地の球技場計画の中止	総会	?	係争中
	辺野古・大浦湾の環境保全	総会	?	住民の反対によって工事中断中
2014	中津市岩屋堂のリニア取り付け道路計画中止	委員会	?	計画が進行中
	諫早湾の排水門開放	総会	×	解決を見ないまま推移
2013	印西市そうふけつばらの保全	委員会	?	中断中
	辺野古・大浦湾の埋め立て計画中止	総会	?	住民の反対によって工事中断中
	中池見湿地の新幹線ルート変更	総会	○	ルートを元に戻すことに決定
2010	上関原発建設工事の中断	総会	?	住民の反対によって工事中断中
	殺虫剤フェンチオンの使用回避	総会	○	中止された
2005	椋似・えりも区間の幹線林道工事の中止	総会	○	中止された
	細身谷畦畔林の林道計画の中止	総会	○	中止された
2003	西表浦内地区のリゾート施設建設計画	総会	×	リゾート施設は完成・営業中
	尖閣列島魚釣島の野生化ヤギの排除	総会	?	解決を見ないまま推移
2002	「外来種管理法(仮称)」の制定	総会	○	制定された
	日高横断道路(静内中札内線)の工事中止	総会	○	中止された
2001	上関原発の環境影響評価	総会	?	住民の反対によって工事中断中
	有明海の環境改善	総会	×	解決を見ないまま推移
2000	上関原発建設予定地の自然の保全	総会	?	住民の反対によって工事中断中
	ジュゴンが生息する沖縄島東海岸の海域保護	総会	?	住民の反対によって工事中断中
	沖縄島北部高江のヘリパッド建設計画	総会	?	住民の反対によって工事中断中

(文責：加藤真)

7. 外来種検討作業部会

開催日：2016 年 3 月 20 日(日) 9 時半—11 時半

場所：仙台市情報・産業プラザ 会議室 2A

出席者：村上・池田・大河内・五箇・常田・戸田・富山・増澤・森本・横畑・草刈

a. 報告事項

1) 当作業部会の委員が多数参加した「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」および「外来種被害防止行動計画」が平成 26 年 3 月 26 日に公表された。下記環境省ウェブサイトを参照。

(<http://www.env.go.jp/nature/intro/1outline/gairailist.html>) および

(<http://www.env.go.jp/nature/intro/1outline/koudou.html>)。

2) 本年 3 月 15 日に特定外来生物当専門家会合が開催され、上記リストの活用により、特定外来生物の追加指定の原案が作成された。

方針として被害の未然防止効果が高い定着予防外来種、統合対策外来種のうち定着段階が「新入初期・限定分布」「小笠原・南西諸島」のものを優先して指定する。今回、利用はあるが、まだ利用が少ない種が存在する爬虫類・両生類・魚類・植物を対象とした。その結果爬虫類はハナガメ等 2 種類、両生類はジョンストンコヤスガエル等 4 種類、魚類ブラウンブルヘッド等 12 種、植物はビーチグラス等 4 種を選定した。今後パブコメ等をへて夏頃に公示される予定。これはリスト作成の一つの成果と思われる。

3) 国内外来種の白山のコマクサの経過と現状説明 増沢委員からその後の取り組み状況について報告があ

った。とくに一部地域で土地所有者がコマクサの除去に反対していて駆除が困難な状況となっており、何らかの対処が必要と思われる。

b. 審議事項

1) メンバーについて

啓発担当として草苺秀紀(WWFJ)、陸上植物担当として西田智子(国立環境技術研究所)の両氏にお願いすることとする。

2) 今後の追加指定種の選定について

今後想定される哺乳類・鳥類・昆虫類・陸生節足動物・その他の無脊椎動物について、当部会としても候補種の検討を行う。とくに生態系影響の大きな種を中心に検討して、特定外来生物当専門家会合委員会に部会委員を通じて意見を反映する。

3) 防除マニュアルについて

現在公的ではないが防除マニュアルの作成について検討が行われつつある。Q&A 形式で外来種に関する疑問に答える形をとることにしているが、この項目の設定に関して論議を行った。また、その中で防除の成功事例を全国的に集めることとなっており、当部会として協力することにした。その他全国の都道府県に今回の外来種リストを送付して各府県の生息情報の収集等を行った。しかし、外来種に関する取り組みはまだ低調であり、主流化に向けてのさらなる検討が必要であることが判明した。

4) 外来生物ハンドブックについて

当初、外来種ハンドブックの続巻として防除マニュアルを中心に作成予定であったが、現在ウェブで様々な事例が報告されている。この中から信頼にたえる事例、とくに外来種対策の成功事例を集めたものを作ることが課題である。環境省でもこの取り組みが行われるようなので、これに協力する形で、部会委員を中心に事例を集める。委員各位で取り組み事例と其中で成果をあげたか、あげつつあるものを村上宛に知らせることとする。防除マニュアルは順次改定されるので、ウェブ上で成果を出すこととし、当初考えていた外来生物ハンドブックで取り上げる内容の再吟味をすることとした。

5) その他

特定外来生物の追加指定は良いことだが、今回のリスト化に当たって検討した国内外来種の取り扱いに関しても、何らかの対応を行うべきであること。また、特定外来生物を地域に限定して指定するなど柔軟な指定ができるように外来生物法の改定についても検討すべきという意見が出された。これらの問題も今後の課題として順次検討することとした。

(文責：村上興正)

8. 将来計画専門委員会

日時：2016 年 3 月 20 日(日) 11:45 ~ 13:45

場所：仙台市情報・産業プラザ(仙台駅前 AER6F) 会議室 2(B)

出席者：粕谷、奥田、酒井、仲岡、巖佐、佐竹、五箇、北島、立木、森長、塩尻、辻、岡部専務理事(オ

ブザーバ)、齊藤会長(オブザーバ)、黒川絢子(オブザーバ次期委員)

議題

1) 学会のさらなる国際化に向け

本委員会では、日本の生態学の国際化(世界に向けた情報発信力のアップ、国外研究者とくに近隣諸国との交流活性化)に向けた本学会大会運営に関する数々の提案をしてきた。

- ・大会の英語プログラム数はほぼ目標(全ての時間帯で英語のプログラムあり)を達成、今後は、大会企画委員会(英語口頭賞発表賞部会)に頼らなくても自律的に英語講演数が維持されるような工夫の必要性が議論された。たとえば、英語賞受賞者に英語シンポを企画してもらう方法などが提案された。
- ・大会の一層の言語バリエーション化にむけ、視覚情報(スライド・ポスター)の和英併記の推奨の必要性が議論された。

2) 若手の活動サポート

アンケートの結果、合宿形式での勉強会、技術講習会、国外研究者との交流会にとくに若手のニーズがあることがわかった。周辺学会の動向も観察しながら継続審議する。

3) 日本生態学のさらなる外部広報活動の必要性とその方法

ネット媒体の活用。たとえば学会ホームページやSNSに会員の研究成果のプレスリリースのリストを示しリンクをはる。大会の公開シンポのユーストリーム・ニコ動などによる配信、などの方法が提案された。(文責:辻和希)

9. 生態教育専門委員会

日時:2016年3月20日(日)14:00~16:00

場所:仙台市情報・産業プラザ会議室I(B)

出席:平山、嶋田、丑丸、宮田、三宅、中井、中田

a. 協議題・報告事項

1) 2016年3月21日 フォーラム U05 -- 17:30-19:30 RoomF 仙台国際センター

企画者:生態学教育専門委員会

フォーラム名:「アクティブ・ラーニングを考える」

司会:宮田理恵(神戸女学院中学部高等学部、アンケート担当:平山大輔(三重大・教育))

このフォーラムでは、生態教育ではアクティブ・ラーニングをどのように扱えば良いのか? 昨年のフォーラムで公開した生態教育支援データベースの活用は? などについて、生態学会員に加えて専門家の元・文科省教科調査官の田代直幸氏(常葉大・教育)、高校現場でアクティブ・ラーニングを実践されてきた鍋田修身氏(隠岐島前高校)をお招きして議論したい。

2) 高校生ポスター発表会・各賞審査員(3/21 9:00-13:00 仙台国際センター):広瀬、三宅、平山、宮田、中井、西脇、中田、丑丸

3) みんなのジュニア生態学講座(3/21 RoomA 13:45-15:15、世話人は嶋田)

若手3名が研究内容、研究のきっかけや中学~高校の様子を語る。

細将貴(京都大学)、岡本朋子(岐阜大学)、角谷拓(国立環境研究所)

4) 生態教育支援データベースの宣伝:コンテンツを充実化するのが一番。それから宣伝。

5) 今年度活動:

- ・生態教育支援データベースについて:日本生物教育学会(8/2)で広瀬委員と中井委員が、日本環境教育学会(8/22)で畑田委員が発表。SSH生徒研究発表会(8/4-5)で中井委員と広瀬委員が生態学会と生態学教育専門委員会のブースでポスター発表。
- ・生態学会誌特集「生態学教育のネットワークを築く」(企画者 畑田委員他):完成間近(西脇委員だけ再投稿できず)。
- ・生態学教育専門委員会合宿(10/3-4、於 京都外語大):「アクティブラーニング」他
- ・HP開設(10/6):
<https://sites.google.com/site/ecolguidebooksite/home>

(文責:西脇亜也)

10. 生態系管理専門委員会

日時:2016年3月20日 9時~11時30分

場所:仙台市情報・産業プラザ 会議室(情報化室)

出席者:鎌田、橋本、西廣、白川、中越、山田、佐藤、津田、平吹、角野、古賀、國井

a. 2015年度活動報告

1) 自然再生フォーラム「仙台湾岸に学ぶ激甚災害後の砂浜植生の再生と保全」の開催

共催:日本景観生態学会東日本大震災復興支援特別委員会、植生学会企画委員会、

協力:国土交通省東北整備局仙台河川国道事務所仙台南部海岸復旧推進室

2015年11月14-15日 フォーラム@東北学院大学および現地検討会@仙台湾岸
参加者93名(現地検討会41名)

2) 2010年12月自然再生講習会「河川・湿地の自然再生の理念と技術」フォローアップ

静岡市麻機遊水地の自然再生活動に係る支援

委員(西廣)が自然再生協議会に加わり、生物多様性保全を考慮した自然再生事業に向けた検討・活動が進められていることについて報告があった。

3) 2011年8月中海での自然再生講習会のフォローアップ

中海の自然再生協議会について、第二期の運営体制について議論が進められていることが國井委員から報告があった。

4) 2014年9月自然再生講習会「京の里山再生—理念と技術」フォローアップ

委員(鎌田)が関与し「宝が池の森」保全再生協議会が設立され、活動が進められていることについて報告があった。

b. 2016年度活動方針

1) 委員長の選任

鎌田委員(継続)を委員長に推薦することとした

2) 委員の構成と選出・継続のあり方

生態系管理の問題に関わる生態学会員を増やすため、個別の活動においては公募等の方法で参画者を募る。委員会の活動を生態学会員と共有するためのフォーラムの開催等を検討する。

3) 内規の見直しについて

内規案を理事会に提案することとした。

4) 今後の活動方針について

- ・自然再生講習会のフォローアップについて
宝ヶ池シンポジウム 2016 (2016年4月24日) に協力団体として参画することが承認された。
- ・自然再生講習会について
企画案をもとにワークショップ形式の講習会の開催を検討することとした。
- ・他学会との連携について
 - ・ELR2017 (景観生態学会、応用生態工学会、緑化工学会の合同大会) に生態学会員が参加できるよう、本委員会が窓口となって調整を進めることとした。
 - ・Eco-DRR やグリーンインフラ等に係る政策へのコミットメントを重要な活動として位置づけることとした。

(文責：鎌田磨人)

11. 大規模長期生態学専門委員会

出席者：日浦、大手、中野、中村、黒川、正木

a. マスタープラン対応

京大生態研センター (拠点) と JaLTER (フィールド) が中心となって以下の大型研究計画を提案
「新世代生物多様性・生態系モニタリングのネットワークと拠点形成：変動環境下における生態系機能の応答機構の解明とレジリエンスの向上を目指して」

①アジアグリーンベルト (AGB) 地域における長期・学際的生態系観測網の構築、② AGB の生態系・生物多様性の生態系サービスの評価、③大規模生態系操作実験による検証、④次世代育成を行うことを目的とする。

- ・前回マスタープラン 2014 を改訂する形で作成 (2020 に大改訂?) →今週中に提出
- ・Future Earth へ生態系サービス評価情報の提供などで連携
- ・これをもとに別の比較的大規模の研究プログラムを当委員会中心に来年度申請を検討

b. 活動報告

- ・「林野庁 4 km メッシュデータ」現在森林総研が主に解析担当とデータ運用規程作成、数年後にデータ公開?
- ・「日本台湾生態学ワークショップ」今年 11 月 12-15 日 龍谷大で開催 (Filling the gap)
- ・「生態学研究センター」時限が外れることが部局長会議で決定、今後 DIWPA 活動により注力していく
- ・「Future Earth ってなんだ?」今学会 24 日自由集会開催 京大 FE 研究推進ユニット主催
- ・「次世代長期研究」今学会 22 日フォーラム開催 JaLTER/ 大規模長期委員会主催
- ・「データペーパー」投稿ガイドラインから投稿規定に

改変

(文責：日浦勉)

12. 野外安全管理委員会

出席者：鈴木、飯島、大館、北村、石原
生態学会仙台大会での企画について

<ランチョンフォーラムの開催>

3月24日 11:45 ~ 13:15 U10 野外調査に初めて行く人のための安全講習を実施する。そのための準備を進めた。

<ポスター展示>

受付あるいはポスター会場、高校生ポスター会場で、ポスター「野外調査に初めて行く人のための安全講習」を展示する。

a. 2015 年度の活動報告

- ・上記、仙台大会でのフォーラム、ポスターを準備した。
- ・野外調査安全管理マニュアル出版にむけて、版下原稿を作成中。版下作成委託の見積りや転載許可申請などを進めている。版下作成委託の仮見積りにバラツキが大きかったため、他社にも見積りを依頼する。
- ・事故情報・ヒヤリハット情報の連絡を依頼したが、とくに報告はなかった。

b. 2016 年度の活動予定

- ・野外調査安全管理マニュアル版下完成
支出を認めていただいた費用を用いて、版下を 10 月中に完成させる。
- ・2017 年、東京大会でのフォーラム、ポスターフォーラム開催に向けた準備を進める。
- ・事故およびヒヤリハット情報収集のための協力依頼
事故およびヒヤリハット事象に遭遇した方は、野外安全管理委員会にご連絡をいただきたい。

(文責：鈴木準一郎)

13. キャリア支援専門委員会

a. 重要な報告事項

これまでの定常的な委員会活動に加えて新たに以下の活動の検討をおこなうこととなった。

- 1) 年大会における小中学生の保育プログラム導入の検討。
年大会時の託児室、ファミリー休憩室は、乳幼児～小学校低学年の子どもをもつ会員向けのサービスとして近年定着している。一方で、小学校中高学年の子どもに関しては、年大会によっては託児室の受け入れ対象外になる年もあり、中学生の子どもに関してはこれまで配慮の対象外だった。中高学年の小学生や中学生を連れて学会に参加せざるを得ない会員は、子どもを預ける場所もなく、個人的に対処せざるを得ないのが現状である。せっかく大会に参加しても、各種講演やシンポ等に参加するための十分な時間が確保できず、子どもにとっても親にとってもストレスが多いのが現状と思われる。また、いざ現在託児室利用児童が小・中学生になる (つまり困る人が増える) ことを考えると、何らかの支援策を講じる必要があるだろう。そこで、小中学生の子どもを連れて大会に参加せざるを得ない学会員への支援策として、小中学生向け体験学習プログラム「こども生態学講

座（仮称）」の企画・実施の検討を開始する。今後、生態学教育専門委員会、博物館関係者らの協力を得ながら、実施体制、受け入れ団体、プログラム等を検討して予定である。

b. 2016 年度計画

- 1) 年大会時のキャリア支援フォーラムの開催
男女共同参画ランチョンフォーラムの開催
キャリア支援ブースの開設
- 2) 男女共同参画学協会主催「女子中高生夏の学校」での野外実習担当
- 3) 男女共同参画学協会連絡会運営委員会およびシンポジウムへの参加
- 4) 東北大学 PEM (Professional Ecosystem Manager) カリキュラムとの連携
- 5) 東京大会での大会参加者の属性調査（男女共同参画学協会連絡会からの依頼）
- 6) 年大会における小中学生の保育プログラム導入の検討

(文責：別宮有紀子)

14. 電子情報委員会

参加：竹中、大澤、富田、真板

a. 報告事項

- ・前年の委員会で確認した通り、当面は現在のレンタル専用サーバを維持するのが適当である。ただし、長期的には、提供するサービスを整理し外部化することも選択肢として考えてよいだろう。サーバ管理業務を継続して電子情報委員会で担当するのは、人の手当の面で無理がある。
- ・学会サーバで提供しているサービス（メーリングリスト、ウェブページ用スペースなど）を整理し各種委員・地区会に周知する。これらのサービスの利用を希望する場合の申請方法も整理する。こうしたサービスの利用者は、委員会・地区会および特に学会執行部で適当と認めた場合に限る。
- ・学会サーバで提供するサービスの利用の注意、および第三者サービスを利用する場合の注意点（個人情報管理など）を整理したガイドラインを本委員会で作成する。このガイドラインの内容については、本委員会で毎年確認し、各種委員・地区会に周知する。

(文責：竹中明夫)

15. 大会のあり方検討部会

a. 設置目的：

大会は言うまでもなく学会の重要な1つの事業であり、生態学の発展、若手研究者や次世代の研究者の奨励、国際化など、これまで多くの課題への対応を実施してきた。そのため、各種の集会や講演に対する各種の奨励賞などを含め、非常に複雑な大会運営となっており、それは会員の多大なボランティア作業によって支えられている。しかし、持続的な大会運営のためには、会員によるボランティア作業への依存度をできるだけ抑制することが必要であり、そのためには大会のあり方自体を検証する必要がある。また、現在進行中の大会運営にかかる電

子システムの改革により、学会事務局・大会企画委員会・大会実行委員会・委託業者の間での作業分担のあり方が変化することも、今後の大会のあり方において考慮する必要がある。これらの諸事情を考慮しながら、現在の大会のあり方を検証しつつ、大会運営の具体的な改革案をまとめることを目的に、本部会を設置する。大会企画委員会や大会実行委員会は、大会運営の実務に忙しいことから、両委員会と連携しつつも、独立した部会として大会運営の具体的な改革案を検討することが本部会の役割である。

※そのほかの検討課題として、託児室などと企業出展についても扱うことが、鹿児島大会中の会議で議論された。

部会員（敬称略）：

大会企画委員会関連（北村、山本、横溝、丸山、和田、三木、半谷、吉田（座長））

大会実行委員会関連（山本（再掲）、関川）

学会執行部（齊藤、岡部、石井、池田）（※可知）

学会事務局（鈴木、橋口）

b. 作業行程案：

2015 年度

- ・ボランティア作業への依存度をどのように抑制できるかの視点から、これまでの大会運営について検証する。5～7月にメール審議、8～9月の間に面談会議を予定。
- ・大会運営の改革案をまとめ、大会企画委員会・理事会・代議員会での議論を経たのち、仙台大会で会員に紹介し、総会、フォーラム、ウェブアンケートなどにより広く会員からの意見をうかがう。

2016 年度

- ・会員からの意見をとりいれ、大会運営の具体的な改革案をまとめて、会長に提言する。
- ・大会運営の改革案は、理事会・代議員会での承認を経たのち、東京大会の総会で会員に報告する。
- ・具体的な大会運営の変更を、2017年度の北海道大会で実施する。

c. 大会運営における現状認識と課題（要約版）

- ・企画委員会・実行委員会の負担が大きく、後任委員の人選にも一部支障がでている
- ・自由集会（大会とは別の関連集会という取扱）の会場管理の負担が大きくあやふや
- ・英語による講演が連続しておらず、非日本語話者が参加できない時間帯がある
- ・シンポジウムの企画提案に関わる作業が多く、企画側にも運営側にも負担となっている
- ・各種集会の種類が4つと多く、新規の大会参加者にはわかりにくく、集会提案がしにくい
- ・高校生や学部生参加の促進や国際化は重要だが、経費や会期の点でコストもかかっている
- ・受賞講演の時間が短くなってきており、十分に研究紹介できていない
- ・企画委員会と実行委員会の交流が少ない
- ・一般口頭発表のカテゴリ分けを一部自動化しており継続性の確保が課題となっている
- ・一般口頭発表の発表ファイルの事前登録には、長所短

所がある

- ・ポスター賞審査（審査、集計、授賞式など）に大きな負担が生じている
- ・ポスター賞審査委員の審査歴を、会員情報に紐づけて管理してほしい
- ・実行委員とポスター部会と高校生ポスター部会を渡り歩く委員の負担が特に大きい
- ・高校生ポスターの要旨の代理入力など引率教員との連絡に大きな負担がかかっている
- ・「みんなのジュニア生態学講座」は評価が高いが、継続性の確保が課題となっている
- ・発表申込のメ切が早い上に厳しいのは、外国からの参加者にはハードルがより高い
- ・大会受付、会場設営、託児室等、公開講演会、企業出展協賛など、実行委員会の負担は大きい、ノウハウが継承されにくい・会場毎に事情が異なるので継続的なコスト削減が難しい

d. 応急処置が必要かつ実施可能な改革事項

- ・ポスター賞運営の負担軽減のため、ポスター賞授賞式に関わる作業を削減し、大会中は審査と集計のみに集中することが東京大会から可能となるよう、ポスター賞規則を改訂する（2月理事会で承認済み、4月発効）。
- ・託児・ファミリー休憩室・企業出展協賛については、東京大会から学会事務局も関わり、企画委員会・実行委員会と協力して運営する（会員管理業務が学会事務局から委託業者に移行するのを受けて実施可能となる）

e. 中長期的な改革事項（北海道大会より実施することが目標）

- シンポジウム・企画集会・自由集会・フォーラムについて
- ・企画側にも運営側にも負担が大きい詳細なルールが多いことを解消しつつ、できるだけルールを共通化・簡素化し、大会参加者にわかりやすくする
- ・シンポジウム等での非会員の講演をこれまで通り認めるが、非会員の年会費・大会参加費は、1年目は免除し2年目以降は有料とすることを検討する
- ・シンポジウム提案の事前審査はなくし、提案メ切は他の講演などと同日にすることを検討する
- ・講演登録料を課金することを検討する（発表回数制限とも関係）
- ・各種集会のあり方オプション（たたき台としての提案）
 - ①シンポ A（3h）・シンポ B（2h）・フォーラム
 - ②シンポ（3h）・自由集会（2h、現行方式）・フォーラム
 - ③現状維持
- ・発表回数制限のあり方オプション（たたき台としての提案）
 - ①自由集会も含めた形で、1人2件まで（現状を明示的にルール化できるが、会期や運営面でのコストは大きいまま）
 - ②自由集会も含めた形で、1人1件まで（現状より厳しくなるが、運営負担は軽減できる）
 - ③1人日本語1件・英語1件まで、または、1人英語2件まで（運営負担を軽減しつつ、国際化を進める効果が期待される）

総会・受賞講演について

- ・総会と授賞式は、これまで通りプレナリーで開催する（合計2h）
- ・受賞講演のあり方オプション（たたき台としての提案）
 - ①プレナリーで開催するが、一つの講演時間は短い
 - ②パラレルで開催するが、一つの講演時間は長い
- ・受賞講演を録画し、YouTubeなどを用いて公開することの可否を検討する

未来の生態学者の拡大について

- ・学部生以下の大会参加費の免除と、高校生ポスターなどの開催は、今後も継続していく

国際化について

- ・発表回数制限のあり方によっては、国際化が大きく進む可能性がある

大会会計について

- ・大会参加費の設定は、これまで通り執行部と実行委員会が相談して決める

企画委員会と実行委員会の新規委員リクルートについて

- ・企画委員会と実行委員会に、ポスドクのボランティア（大会参加費を免除するリワード）を募集することの可否を検討する

その他

- ・大会会場における利便性向上のため、Wi-Fi環境を経営的に整備することを検討する（40万円ほどの経費が必要）

（文責：吉田丈人）

16. 日本学術会議の活動報告

- 日本生態学会仙台大会において、3月24日午後日本学術会議生態科学分科会の公開シンポジウムを開催する。矢原徹一さんが提案されていたFuture Earthの活動に対する説明会と合同にした。大会では理事会提案のフォーラム「生態学の展望」（責任者、巖佐+矢原）という形式になっている。大会参加者以外の人でも参加できるというルールのため、それらの人には予め申し込んでもらう工夫をしている。
- 国立自然史博物館設立に関する提言が、動物科学分科会を中心にしてとりまとめられ、生態科学分科会をふくむ多数の生物学系の分科会や基礎生物学と統合生物学の両委員会のサポートを受けてすすめられている。日本学術会議から提言として承認するに必要な文章の査読が現在行われている。
- マスタープラン2017の公募がはじまった。これは3年ごとに行われる。中野伸一委員（京都大学生態学研究センター長）を中心に取りまとめて申請案を提出され、生態科学分科会からの提出になる予定。
- 日本学術会議の経費が少なく、また多くの会議が開催予定であるために年度予算が不足するとの会長からの知らせがあった。そのため会議を開催することを遠慮して、できるかぎり電子メールによる審議としている。

（文責：巖佐庸）

17. 学会運営改革の進捗状況報告（2016年3月20日現在）

これまでの経緯：

- 1) 2014年3月14日：広島大会でタスクフォース（運営改革作業部会の前身）が発足
- 2) 2015年3月20日：鹿児島大会総会にて、学会運営と大会運営体制を見直し、学会業務の一部を業務委託する方針が承認（ただし、詳細は理事会承認を受ける条件つき）
- 3) 同年7月11日：理事会にて、会員管理・大会運営の一部とWEB選挙システムの開発を国際文献社に業務委託することが承認（詳細をニュースレター No.37に掲載）
- 4) 同年9月8日：会員管理、大会運営、WEB選挙システムの業務仕様書を送付
- 5) 同年10月2日：「個人情報取扱いに関する覚書」の取り交わし
- 6) 同年10月4日：「あり方検討部会」第1回検討会（集会種別、締切厳守の見直し等）
- 7) 同年11月14日：第1回東京大会実行委員会（締切厳守、大会HP等の協議）
- 8) 同年12月11日：会員管理業務に関する第1回打合せ（富田、執行部）
- 9) 2016年2月26日：会員管理業務の委託（4月1日開始）について本契約を締結。終了後、大会運営業務に関する第1回打合せ（半谷、執行部）
- 10) 大会運営業務（東京大会以降）、WEB選挙システム（2017年度以降）については、契約不要。今後、大会企画・実行・電子情報委員会と調整しながら、詳細を決定する。

今後の予定：

①仙台大会期間における関連行事

- 1) 国際文献社による「マイページ」のデモ（国際文献社の会員管理システム）
 - ・日時：3月21日 12:00-18:00、22日 9:00-13:00
 - ・場所：仙台国際センター 展示棟1階 受付コーナー
- 2) 総会
 - ・進捗報告
- 3) 「生態学会の将来について語る会（総会第2部）」の開催
 - ・日時：2016年3月23日 15:30-17:00
 - ・場所：総会会場（仙台国際センター RoomA）
 - ・趣旨：「持続的な学会運営体制の再構築」が必要であることを明確にし、現状の整理と、これまでの部会における議論を踏まえ、再構築のために取り得る具体的なオプションとロードマップを会員と共有するとともに、会員と意見交換を図る。
 - ・演題と講演者
 - (1) 生態学会運営のこれまでと将来：齊藤隆（北大）
 - (2) 電子情報システム管理のこれまでと今後：竹中明夫（国環研）
 - (3) 大会運営業務と連携した望ましい会員管理システムの提案：富田基史（電中研）
 - (4) 改革による財政的問題点と展望：池田浩明（農環研）

(5) 持続的な大会運営に向けての課題と改革：吉田丈人（東大）

(6) 総合討論

- ②会員向けアンケート調査の実施（Questantによるオンライン・アンケート）
 - ・第1回：財政（収入増か支出減か）と大会運営（大会の不満点や簡素化）の改革に関して、幅広く、かつ、平易な設問を執行部で作成し、会員の意見分布を調査（2016年4-5月予定）
 - ・第2回：企画委員会とあり方検討部会で具体的な大会改革案を作成し、それをベースにした意見集約を実施（同年7月理事会以降）
- ③大会改革の実行
 - ・アンケート結果を受け、大会改革案を修正し、東京大会総会で決議。北海道大会の運営からの導入を図る。
- ④財政改革の実行
 - ・アンケート結果を受け、財政改革案（骨子）を作成し、東京大会総会で提案。国際情報発信強化費（2018-22）の採択額に応じた財政改革案を作成し、北海道大会総会で決議。国際情報発信強化費（2018-22）の採択額に応じた財政改革を2018年4月以降に導入。

学会運営改革に伴う業務対応表

業務	改革前	改革後
1. 会員管理		
入退会管理	事務局	国際文献社に委託（一部は事務局）
年会費支払い	郵便振替、銀行自動引落、クレジット（国外）	郵便振替、銀行自動引落、クレジット（国外）
学会HP	事務局	事務局
学会誌発送等	事務局	事務局
2. 大会運営		
参加申込	学会自作のWEBシステム	国際文献社のWEBシステム（和・英）
参加費の設定	実行委員会→理事会	実行委員会→執行部→理事会
参加費納入管理	JTB委託	国際文献社に委託
参加費支払い	クレジット、コンビニ、銀行振込、ペイジー	クレジット*、コンビニ*、郵便振替 *国際文献社「マイページ」（和・英）
大会HP	実行委員会	実行委員会
当日受付関連	JTB委託	国際文献社に委託
プログラム印刷	土倉事務所	国際文献社に委託
3. 学会サーバ		
	レンタル	レンタル（ただし今後は、クラウドサーバへ移行し、システム管理を外部委託→電子情報委員会で検討）
4. 選挙（17年より）		
投票	自家製のWEBシステム、郵送	国際文献社のWEBシステム（和・英）、希望者には投票用紙を郵送
発送、開票等	事務局（発送）、選挙管理委員会	事務局（発送）、選挙管理委員会

斜体：変更のある部分

（文責：岡部貴美子）

18. 日本生態学会 研究倫理に関する指針

日本生態学会は生態学の発展と普及を志す者の学術コミュニティです。

我々の活動の基盤をなす研究は、研究者個々の自由な発想を源としていますが、社会の信頼を失っては、その発展と普及は望めません。データの捏造・改竄、記述の剽窃、著作権の侵害などはあってはならないことです。研究者としての行動規範（日本学術会議 2013）やガイドライン（文部科学省 2015）を十分に理解し、研究に臨まなくてはなりません。

研究の多くは、公的資金や財団などからの助成金によって支えられています。研究資金は適正に使用、管理しなければなりません。

また、調査・研究の実施にあたっては、環境に十分に配慮し、生物の取り扱いに関する法令や指針などを遵守しなければなりません。

2016年2月27日 日本生態学会理事会採択
研究倫理（一般）に関するもの

「科学者の行動規範」（日本学術会議）

<http://www.scj.go.jp/ja/scj/kihan/>

「研究活動の不正行為への対応のガイドライン」（文部科学省）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu12/houkoku/06082316.htm

研究費の使用、管理に関するもの

「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」（文部科学省）

http://www.mext.go.jp/a_menu/kansa/houkoku/1343904.htm

出版倫理に関するもの

The Committee on Publication Ethics（COPE）

<http://publicationethics.org/>

出版倫理の最良実践ガイドライン（日本語訳版）

http://www.wiley.co.jp/blog/pse/wp-content/uploads/2015/11/Wiley_Pub_Ethics_Guidelines_2e_JPN_v2_201511.pdf

研究試料の採取に関するもの

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H04/H04HO075.html>

自然公園に関する法令一覧（環境省）

<http://www.env.go.jp/park/doc/law/np.html>

国立公園制度に関する解説（環境省）

<http://www.env.go.jp/park/system/>

野生鳥獣の捕獲許可制度の概要（環境省）

<https://www.env.go.jp/nature/choju/capture/capture1.html>

鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H14/H14HO088.html>

遊漁・海面利用の基本的ルール（水産庁）

http://www.jfa.maff.go.jp/j/yugyo/y_kisei/

動物実験に関するもの

動物の愛護及び管理に関する法律 <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S48/S48HO105.html>

研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針（文部科学省）

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/06060904.htm
動物の飼養及び保管並びに苦痛の軽減に関する指針（環境省）

https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/nt_h180428_88.html

（文責：齊藤隆）

B. 審議事項

第1号議案 役員退任に伴う改選に関する件

役員任期満了に伴い、定款のとおり正会員の投票による理事兼代表理事・会長候補者を選出する選挙の結果ならびに理事会の推薦する理事及び監事候補者を参考とすることが提案され、一同これを承認したので、下記の者を指名し、この者につきその可否を諮ったところ、満場意義なくこれに賛成したので、下記のとおり可決確定した。

理事 可知直毅、占部城太郎、久米篤、古賀庸憲（任期を1年）、吉田丈人、日浦勉、大澤剛士、辻和希、鈴木まほろ、宮下直、佐竹暁子、湯本貴和、川北篤、近藤倫生、別宮（坂田）有紀子、吉田正人

監事 竹中明夫

第2号議案 代表理事・会長候補者推薦に関する件

正会員の投票による理事兼代表理事・会長候補者を選出する選挙結果に基づき、候補者として得票数の最も多かった以下の者を総会より理事会に推薦することが満場意義なく可決承認された。

理事兼代表理事・会長候補者 可知直毅

第3号議案 2015年度事業報告決算に関する件

当期（自2015年1月1日至同年12月31日）における決算について満場意義なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収入の部			支出の部		
	15 予算	15 決算		15 予算	15 決算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	29,500,000	29,089,150	ER	18,000,000	17,346,000
正会員（学生）	6,500,000	6,915,800	生態誌	4,000,000	3,065,050
賛助会員	2,200,000	1,913,000	保全誌	2,000,000	1,660,300
地区会費	800,000	280,600	ニュースレター	1,000,000	844,236
小計	39,000,000	38,198,550	ER 英文校閲・翻訳	2,500,000	3,319,006
ER 売上還元金	1,650,000	1,650,000	ER 誌 Open Access 経費	4,000,000	1,787,867
編集事務費用	2,000,000	2,000,000	ER 広報費		810,000
学会誌売上げ	1,200,000	1,068,200	和文誌編集費	350,000	681,711
科研費			小計	31,850,000	29,514,170
国際情報発信強化 A	17,600,000	17,600,000	会議費	200,000	64,467
公開講演会	1,300,000	1,400,000	旅費・交通費	2,500,000	3,465,971
小計	18,900,000	19,000,000	人件費	13,500,000	13,711,034
出版印税	1,000,000	1,241,241	地区会活動費	2,500,000	3,300,581
広告代	180,000	210,000	大会支出	18,500,000	16,239,255
著作権使用料	350,000	509,567	公開講演会	1,000,000	851,850
ER 超過ページ代	100,000	0	INTECOL 会費	450,000	466,735
大会収入	18,500,000	17,011,300	事務費		
講習会費	100,000	95,000	通信費	800,000	421,905
その他	10,000	177,796	消耗品費	300,000	274,894
地区会からの寄付金			雑費	300,000	196,457
前年度繰越金	71,533,861	71,239,961	銀行手数料	150,000	191,315
			レンタルサーバ料	470,000	484,920
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	300,000	284,856
			小計	4,000,000	3,534,347
			各種委員会費	1,500,000	1,538,177
			選挙費	600,000	713,971
			EAFES 費用	200,000	0
			講習会費	350,000	416,526
			法人税	500,000	700,000
			次年度繰越金	76,873,861	77,884,531
合計	154,523,861	152,401,615	合計	154,523,861	152,401,615
単年度収入	82,990,000	81,161,654	単年度支出	77,650,000	74,517,084

<特別会計>

宮地基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	15 予算	15 決算		15 予算	15 決算
前年度繰越金	1,797,139	1,797,139	宮地賞賞金	300,000	332,313
預金利息	0	274	雑費	2,000	1,620
			次年度繰越金	1,495,139	1,463,480
合 計	1,797,139	1,797,413	合 計	1,797,139	1,797,413

大島基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	15 予算	15 決算		15 予算	15 決算
前年度繰越金	8,733,465	8,733,465	大島賞賞金	200,000	221,542
預金利息	0	1,404	雑費	1,500	1,080
			次年度繰越金	8,531,965	8,512,247
合 計	8,733,465	8,734,869	合 計	8,733,465	8,734,869

琵琶湖賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	15 予算	15 決算		15 予算	15 決算
前年度繰越金	240,135	240,135	旅費	200,000	184,653
預金利息	0	25	その他諸費用	40,135	55,507
			次年度繰越金	0	0
合 計	240,135	240,160	合 計	240,135	240,160

鈴木賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	15 予算	15 決算		15 予算	15 決算
前年度繰越金	4,697,301	4,697,301	鈴木賞賞金	200,000	200,000
預金利息	0	749	雑費	2,500	2,160
			次年度繰越金	4,494,801	4,495,890
合 計	4,697,301	4,698,050	合 計	4,697,301	4,698,050

第4号議案 2016年度予算に関する件

次期（自2016年1月1日至同年12月31日）における予算案について満場意義なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収入の部			支出の部		
	15 決算	16 予算		15 決算	16 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	29,089,150	29,100,000	ER	17,346,000	13,750,000
正会員（学生）	6,915,800	6,700,000	生態誌	3,065,050	4,000,000
賛助会員	1,913,000	1,900,000	保全誌	1,660,300	2,000,000
地区会費	280,600	300,000	ニュースレター	844,236	1,000,000
小計	38,198,550	38,000,000	ER 英文校閲・翻訳	3,319,006	3,500,000
ER 売上還元金	1,650,000		ER 誌 Open Access 経費	1,787,867	2,000,000
編集事務費用	2,000,000		ER 広報費	810,000	1,000,000
学会誌売上げ	1,068,200	1,050,000	和文誌編集費	681,711	700,000
科研費			小計	29,514,170	27,950,000
国際情報発信強化 A	17,600,000	16,600,000	会議費	64,467	150,000
公開講演会	1,400,000	1,300,000	旅費・交通費	3,465,971	3,500,000
小計	19,000,000	17,900,000	人件費	13,711,034	13,500,000
出版印税	1,241,241	1,100,000	地区会活動費	3,300,581	3,300,000
広告代	210,000	180,000	大会支出	16,239,255	24,000,000
著作権使用料	509,567	500,000	キャリア支援活動委託費		540,000
ER 超過ページ代	0	0	公開講演会	851,850	1,400,000
大会収入	17,011,300	24,000,000	INTECOL 会費	466,735	450,000
講習会費	95,000	100,000	事務費		
その他	177,796	10,000	通信費	421,905	550,000
前年度繰越金	71,239,961	77,884,531	消耗品費	274,894	300,000
			雑費	196,457	200,000
			銀行手数料	191,315	200,000
			レンタルサーバ料	484,920	470,000
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	284,856	100,000
			小計	3,534,347	3,500,000
			各種委員会費	1,538,177	1,500,000
			選挙費	713,971	0
			EAFES 費用	0	200,000
			講習会費	416,526	400,000
			学会運営改革推進費		
			会員管理委託費（初期）		2,257,200
			会員管理委託費（経常）		4,050,000
			大会運営委託費（初期）		1,378,080
			小計		7,685,280
			法人税	700,000	500,000
			次年度繰越金	77,884,531	72,149,251
合計	152,401,615	160,724,531	合計	152,401,615	160,724,531
単年度収入	81,161,654	82,840,000	単年度支出	74,517,084	88,575,280

<特別会計>

宮地基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	15 決算	16 予算		15 決算	16 予算
前年度繰越金	1,797,139	1,463,480	宮地賞賞金	332,313	332,313
預金利息	274	0	雑費	1,620	1,620
			次年度繰越金	1,463,480	1,129,547
合 計	1,797,413	1,463,480	合 計	1,797,413	1,463,480

大島基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	15 決算	16 予算		15 決算	16 予算
前年度繰越金	8,733,465	8,512,247	大島賞賞金	221,542	0
預金利息	1,404	0	雑費	1,080	0
			次年度繰越金	8,512,247	8,512,247
合 計	8,734,869	8,512,247	合 計	8,734,869	8,512,247

琵琶湖賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	15 決算	16 予算		15 決算	16 予算
前年度繰越金	240,135	0	旅費	184,653	
預金利息	25	18	その他諸費用	55,507	18
			次年度繰越金	0	0
合 計	240,160	18	合 計	240,160	18

鈴木賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	15 決算	16 予算		15 決算	16 予算
前年度繰越金	4,697,301	4,495,890	鈴木賞賞金	200,000	150,000
預金利息	749	0	雑費	2,160	1,620
			次年度繰越金	4,495,890	4,344,270
合 計	4,698,050	4,495,890	合 計	4,698,050	4,495,890

第5号議案 第65回大会（2018年）開催地および第66回大会（2019年）担当地区会に関する件

第65回大会（2018年）開催地候補地札幌市（北海道地区会）および第66回大会（2019年）担当地区会候補近畿地区の提案があり満場意義なく承認可決した。

日本生態学会 大会開催地 一覧

*INTECOL 開催年
**EAFES 日本開催年

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中四国	九州
1975					京都		
1976				名古屋			
1977						広島	
1978							福岡
1979			横浜				
1980		弘前					
1981	札幌						
1982					大阪		
1983				松本			
1984			東京				
1985						広島	
1986					京都		
1987							沖縄
1988		仙台					
1989	釧路						
1990			横浜*				
1991					奈良		
1992				名古屋			
1993						松江	
1994							福岡
1995		盛岡					
1996			八王子				
1997	札幌						
1998					京都		
1999				松本			
2000						広島	
2001							熊本
2002		仙台					
2003			つくば				
2004	釧路						
2005					大阪		
2006				新潟**			
2007						松山	
2008							福岡
2009		盛岡					
2010			東京				
2011	札幌						
2012					大津**		
2013				静岡			
2014						広島	
2015							鹿児島
2016		仙台					
2017			東京				
2018	(札幌)						
2019					○		

II. 第63回日本生態学会大会の記録

第63回日本生態学会大会は仙台国際センターおよび仙台市情報・産業プラザを会場として2014年3月20日～3月24日に開催されました。

大会期間中に公開講演会1、シンポジウム4、フォーラム13、企画集会24、一般講演（口頭発表）243、一般

講演（ポスター発表）909、高校生ポスター40、自由集会37、が行われました。参加者は2396名でした。5日間の日程とポスター賞（日本生態学会公認表彰）・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

日 程

- 3月20日 代議員会、各種委員会（大会企画委員会、Ecological Research 刊行協議会、日本生態学会誌刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会、野外安全管理委員会、キャリア支援専門委員会、電子情報委員会）、公開講演会
- 3月21日 シンポジウム、一般講演（口頭発表）、フォーラム、ランチョンフォーラム、高校生ポスター発表、企画集会、自由集会
- 3月22日 一般講演（口頭発表・ポスター発表）、シンポジウム、フォーラム、ランチョンフォーラム、企画集会、自由集会
- 3月23日 総会、各賞授賞式、受賞講演、自由集会、懇親会
- 3月24日 一般講演（口頭発表・ポスター発表）、シンポジウム、フォーラム、ランチョンフォーラム、企画集会、自由集会

ポスター賞受賞者

<群落・遷移・更新>

【最優秀賞】

「熱帯降雨林における伐採に対するレジリエンスの空間変異—Landsat 時系列解析を用いて—」* 園田隼人、藤木庄五郎、青柳亮太、北山兼弘、(京大・農、森林生態)

【優秀賞】

「風穴地における高山植物の定着要因—局所環境が与える影響—」* 和久井彬実 (北大・農)、末吉正尚 (自然共生研究セ)、下川部歩真 (北海道庁)、工藤岳 (北大院・地球環境)、森本淳子 (北大院・農)、中村太士 (北大院・農)

「自然撓乱としてのシカ採食の役割—林床植物の群集集合プロセスからの評価」* 西澤啓太、辰巳晋一 (横浜国大・環境情報)、北川涼 (森林総研)、森章 (横浜国大・環境情報)

<植物個体群・繁殖・生活史>

【最優秀賞】

「オオバノエンレイソウの分布域の決定要因：緯度勾配に沿った適応度成分の比較」* 佐々木駿、川村弥司子 (山形大・理)、山岸洋貴 (弘前大・白神)、大原雅 (北海道大・地球環境)、富松裕 (山形大・理)

【優秀賞】

「連続的標高勾配に沿ったアキノキリンソウ (広義) の遺伝構造の検出：垂直分布における遺伝的障壁は何か？」* 木村拓真 (東北大・院・生命)、阪口翔太 (京大・院・人環)、伊藤元己 (東大・院・総合文化)、永野惇 (龍谷大・農、JST さきがけ)、京大・生態研セ)、工藤洋 (京

大・生態研セ)、牧雅之(東北大・植物園)

「フクジュソウの花の形質の多様性とその要因～戦略は雪解け直後に咲き、花弁の重なりを増やすこと!?!」* 近藤菜々美(横浜国立大・地球生態)、近藤博史(横浜国立大・環境情報)、酒井暁子(横浜国立大・環境情報)
「ナニワズの性的二型性：両性株と雌株の表現型と繁殖成功度の比較」* 柴田あかり(北大・環境科学)、工藤岳(北大・地球環境)、亀山慶晃(東京農大・地球環境)

<植物生理生態学>

【最優秀賞】

「落葉広葉樹林冠木の葉群フェノロジーの年変動と温暖化応答」* 長尾彩加、大橋千遼(岐阜大・応用生物)、斎藤琢、村岡裕由(岐阜大・流域圏センター)

「葉の水利用・力学特性は内部のコンパートメント化とどう関係しているか?」* 河合清定、三好林太郎、岡田直紀(京大院・農)

【優秀賞】

「ウワミズザクラの異なる種類のシュートにみられる構造的、機能的な違い」* 阿部 亜里紗(京大院・農)、岡田直紀(京大院・地球環境)

「鉾山跡地に自生するクサレダマ (*Lysimachia vulgaris* L. var. *davurica* (Ledeb.) R. Knuth) のCd 解毒機構の解明と内生細菌の影響」* 竹島綾乃、中村隼人、山路恵子(筑波大学大学院・生命環境)

<動物と植物の相互作用>

【最優秀賞】

「グルコシノレート側鎖長の多様化とアブラナシロチョウ相互作用における役割」* 岡村悠、村上正志(千葉大・理)

【優秀賞】

「ツリガネニンジンの花生態：昼と夜の送粉者の貢献度」* 船本大智(筑波大・生物)、大橋一晴(筑波大・生命環境系)

「Keep regulars. attract vegabonds: 行動的に多様なポリネーターを利用するための花色変化」* 鈴木美季(筑波大・生命環境)、大橋一晴(筑波大・生命環境)

「虫害堅果を透視してネズミの選好性を探る —幼虫の有無、種・サイズ、摂食率に着目して—」* 柏木晴香(名古屋大・院・生命農)、木下峻一(ウィーン大・古生物)、佐々木理(東北大・博物館)、梶村恒(名古屋大・院・生命農)

<進化>

【優秀賞】

「ミスミソウにおける訪昆虫の色彩認識能力と花色多型の関係」* 亀岡慎一郎(京大院・人環)、崎尾均(新潟大・農)、阿部晴恵(新潟大・農)、村井良徳(科博・植物)、大橋一晴(筑波大・生命環境)、瀬戸口浩彰(京大院・人環)

「ナガゴミムシ属2種 (Coleoptera: Carabidae) における過去の繁殖干渉がもたらした一方向性の遺伝子浸透と形質置換」* 小須田修平(弘前大・農)、笹川幸治(千葉大・教)、池田紘士(弘前大・農)

<生物多様性>

【最優秀賞】

「森林管理により生物多様性はどのように変化するのか：国内既存文献の網羅的解析」* 矢納早紀子(京大・森林生態)、Rebecca Spake (University of Southampton)、小野田雄介(京大・森林生態)、北山兼弘(京大・森林生態)

「環境 DNA の断片長による見た目の分解速度の違い」* 徐寿明(神戸大・発達)、村上弘章(京大院・フィールド研舞鶴)、坂田雅之(神戸大・発達)、益田玲爾(京大院・フィールド研舞鶴)、山本哲史、源利文(神戸大・発達)

【優秀賞】

「樹木多様性に基づく土砂災害リスク削減の可能性」* 小林勇太(横国大・環境情報)、森章(横国大・環境情報)

「水田における「ただの虫」の多様性と天敵アシナガゲモ類の動態」筒井優* (東大・農)、馬場友希(農環研)、田中幸一(農環研)、宮下直(東大・農)

<動物群集>

【最優秀賞】

「分断化景観における鳥類多様性の季節変化：生息地ネットワークと河畔林に注目して」* 藪原佑樹(北大院農)、赤坂卓美(帯広畜産大)、山浦悠一(森林総研)、山中聡(北大院農)、中村太士(北大院農)

【優秀賞】

「食物網における栄養転換効率の栄養段階依存性—21 の水域食物網を比較して—」* 高嶋あやか(龍谷・理工)、近藤倫生(龍谷・理工)

「札幌市における雪堆積場からの融雪水が河川生態系に与える影響」* 川尻啓太(北大・農)、末吉正尚(土木研)、石山信雄(北大・農)、太田民久(地球研)、福澤加里部(北大・FSC)、中村太士(北大・農)

<動物個体群>

【最優秀賞】

「マルチプルパタニティ頻度を用いた複数オス交尾頻度の推定—エゾヤチネズミを例に—」* 若林紘子(北大・環科院)、齊藤隆(北大・北方圏 FSC)

「回遊性ハゼ科魚類の淡水進出に伴う平行的種分化：近似バイズ法を用いた検証」* 山崎曜(京大院理)、武島弘彦(地球研)、鹿野雄一(九大決断)、大迫尚晴(宜野湾市)、鈴木寿之(川西緑台高)、西田睦(琉球大)、渡辺勝敏(京大院理)

【優秀賞】

「魚類からの環境 RNA 放出速度と温度依存性」* 垣見直希(龍谷大・院・理工)、河野吉将、山中裕樹(龍谷大・理工)

「ベイツ擬態におけるモデルとミミックの個体数推移に対する非線形時系列解析」* 加藤三歩(鹿大・連合農)、辻和希(琉大・農)、立田晴記(琉大・農)

「ミズクラゲのストロベレーションのチオウレアによる阻害機構」* 山守瑠奈(京大院農)、前川真吾(京大院農)、豊原治彦(京大院農)

<行動>

【最優秀賞】

「横風を相殺しつつ帰巢するオオミズナギドリ」* 後藤佑介(東大・大海研)、依田憲(名大・環境)、佐藤克文(東大・大海研)

「可動サンゴに棲み込む新たな共生者の発見〜ムシノスチョウジガイ属・スツボサンゴ属のサンゴと共生するホシムシおよびヤドカリ〜」* 井川桃子、加藤真(京大院・人環)

【優秀賞】

「グッピーのメスの脳で発現する配偶者選好行動に関わる遺伝子」* 稲田垂穂(東北大・生命)、佐藤綾(群馬大・教育)、牧野能士(東北大・生命)、河田雅圭(東北大・生命)

<保全>

【最優秀賞】

「環境DNA分析手法を用いたオオサンショウウオ(*Andrias japonicus*)の広域調査」* 日高舜介、勝原光希、富田勢、丑丸敦史、源利文(神戸大・発達)

「伝統的管理の実験的導入による里草地再生」* 長井拓馬、丑丸敦史(神戸大院・人間発達環境)、内田圭(東京大・総合文化)

【優秀賞】

「長野県ツキノワグマ個体群における集団遺伝学的研究」* 田村大也(京大院・理・生物)、早川美波(碧南海浜水族館・青少年海の科学館)、林秀剛(信州ツキノワグマ研究会)、岸元良輔(長野県環境保全研究所)、東城幸治(信州大・理・生物)

「MIG-seq法によるゲノムワイドSNP分析によって明らかになったレブニアツモリソウの遺伝的な島内分化」* 伏見愛雄(東北大・農)、松木悠(東北大・農)、河原孝行(森林総研)、高橋英樹(北大・総合博)、伊澤岳師(北大・農)、陶山佳久(東北大・農)

「千葉県北部に残る草原：植物種多様性に対する過去と現在の土地利用の影響」* 野田顕(東邦大・理)・山ノ内崇志(東邦大・理)・小林翔(東邦大・理)・近藤昭彦(千葉大・環境リモセン)・西廣淳(東邦大・理)

<生態系管理>

【最優秀賞】

「衛星から熱帯林樹木群集組成の時空間変化をとらえられるのか?」* 藤木庄五郎(京大・農・森林生態)、青柳亮太(京大・農・森林生態)、田中厚志(日本森林技術協会)、今井伸夫(京大院・霊長類)、鮫島弘光(地球環境戦略研究機関)、北山兼弘(京大・農・森林生態)

【優秀賞】

「ヒグマ(*Ursus arctos*)の農作物利用における規定要因の解明〜生息地環境と個体情報に着目して〜」* 崎山智樹(北大農)、森本淳子(北大院・農)、松林順(地球研)、古川泰人(北大院・農)、近藤麻実(道総研)、釣賀一二三(道総研)、間野勉(道総研)

「淡路島における木の実利用の記録」奥井かおり(兵庫県立大・緑環境)

<外来種>

【最優秀賞】

「知床国立公園における道路に沿った外来および在来の植物群集の分布パターンと競合」* 冲邑時代(横浜国大・環境情報)、小出大(国環研・地球環境)、森章(横浜国大・環境情報)

「複数の経路で導入される他殖性ドクムギ属の砂浜への分布拡大プロセス」* 樋口裕美子、下野嘉子、富永達(京大・農)

<物質循環>

【最優秀賞】

「Root exudates mediate N decomposition by shaping microbial growth」* 孫麗娟(京大農森林生態)、小南裕志(森林総研関西)、安宅未央子(京大農森林水文)、吉村健一(森林総研関西)、北山兼弘(京大農森林生態)

【優秀賞】

「森林生態系における埋没腐植土の地化学的・微生物学的特性」* Kaneko, M. (Rakuno-gakuen Univ.), Suetsugu, R. (Tokyo Univ.), Isobe, K. (Tokyo Univ.), Hobara, S. (Rakuno-gakuen Univ.)

「Aerobic methane production by planktonic microbes under phosphorus-starved condition in lakes」* Khatun, S. (Univ. Yamanashi), Kojima, H. (Hokkaido Univ.), Iwata, T. (Univ. Yamanashi)

高校生ポスター賞受賞者

【最優秀賞】

「変形菌の研究 変形体の「自他」を見分ける力」増井真那(東京都立小石川中等教育学校)

「土壌からみるマングローブ域の物質循環 ~マングローブ林土壌と林外土壌の比較研究~」阿部隼人(東京都立科学技術高校スーパープロジェクト IRIOMOTE)

「狭山丘陵の谷戸におけるアメリカザリガニの生活史」* 長井孝彦、* 吉野舜太郎、* 川口建、* 吉岡凜太郎、関口伸一(海城中学高等学校生物部)

【優秀賞】

「ニホンザル群におけるグルーミングの影響 ~高崎山と幸島の比較~」* 牧尚澄、古田朋綺、* 金田海愛、清嶋美保子、宮永将喜、* 深田幸平(大分舞鶴高校)

「ムササビの活動時間の研究 自作センサーを中心とした測定を試み」* 池谷友佑、* 梶谷鞠江、* 三宅桃葉、岡崎弘幸(中央大学附属高等学校)

「カワニナを通して考える地域の生態系II」* 櫻井基樹、* 中島拓哉、* 二村勇輔、* 細川城太郎、* 矢島亮太(岐阜県立岐山高校)

「アライグマが好む生息条件と周辺住民の意識調査」* 佐藤翔太、* 渋谷祐貴、* 福田龍、石垣翔大、河野和、茂手木信斗(埼玉県立坂戸西高校)

「伊豆大島の植生遷移と生息するアリ」* 膳若菜、後長加奈絵、安川優紀(東京都立国分寺高校)

【審査員特別賞】

「環境DNAを用いたミシシッピアカミミガメの生息分布調査」* 千古晴菜、* 瓶内ひなた、* 松谷朱莉、安藤一喜、高橋真、藤井大地、藤江祐哉、脇舩真穂(兵庫

県立加古川東高校)

「矛盾する？ タンポポ「環境指標性」日高地方のタンポポ調査より」濱田真衣子、小山桃葉、佐藤誠洋、*小林美佑、*小出明日香、*望月春菜、山下二千愛、花光明、原幸日、清水理（和歌山県立日高高等学校）

「埼玉県東部へのアライグマの広がり」原田愛華（埼玉県立越ヶ谷高校）

「ヨモギタマバエの虫えいに多型現象はあるか？」*千葉汀、*深堀宗一郎、*佐藤杏香（宮城県仙台第三高校）

「ネオニコチノイド系農薬イミダクロプリドがミジンコに与える影響」森永康寛（東京都立戸山高校）

「竹粉を使ったきのこ栽培」*青本沙也、*國安里衣（ノートルダム清心学園清心女子高等学校）

「嗜好飲料の摂取によるハツカネズミの血糖値上昇の変化」渡邊葵乃（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校）

「無葉緑植物ギンリョウソウと外生菌根菌の共生関係」*越智匠海、*菅原麻由、佐藤直、中陣遥香、日下真帆、中桐悠一郎、*岡田和太、森本建、東優樹（立命館慶祥高等学校）

「伊豆大島の植生遷移と土壌動物との相関性」*勝島可奈子、近藤美波（東京都立国分寺高校）

「南日本における港のアリの地域間比較」*新有留茜、*若松良衣、原田豊（池田学園池田高等学校）

【ナチュラリスト賞】

「雑木林の土の中にはどのような種子があるか？」*後藤遼太、*岡本泰崇、*佐々木洸大、関口伸一（海城中学高等学校生物部）

「有機栽培水田におけるケイソウの個体数変化」*富加津柚奈、野崎真史（群馬県立高崎女子高校）

「観音山総合研究1 観音山ニッコウキスゲはどこから来たか？」*橋本実希、*太田直輝（埼玉県立熊谷西高校）

「動く植物の就眠運動の研究」*山岡歩美、青本沙也、國安里衣（ノートルダム清心学園清心女子高等学校）

「解明しよう!! マングローブの葉の不思議!!—マングローブ植物の葉についての調査研究—」*下田凜太郎、*菅野琴（東京都立科学技術高校スーパープロジェクトIRIOMOTE）

「CO2をより多く吸収するのは天然林か人工林か？」*郷原雪枝、加茂優奈、秋山繁治（ノートルダム清心学園清心女子高等学校）

「環境の違いにおけるヘマトコッカスの状態変化」菅原玲（埼玉県立川越女子高校）

「光は微生物の増殖に影響を与えるのか？」*保坂京花、野崎真史（群馬県立高崎女子高校）

「揖斐川水系支流におけるイワナとアマゴの属間雑種の解析」*森本早稀、*北村拓斗、後藤暁彦、丹羽大樹、神戸朱琉、前田晃太郎、江崎正英、久富匡皓、小島瑛希子、後藤那月、佐賀美月、高山あまね、塩谷祐貴、岡田翔吾、鷺見太樹、坪井玲、八戸啓太、矢島佳依（岐阜市立岐阜高等学校）

「豊橋市の干潟に生息する底生生物の研究」*濱口青空、村本周平、*河合団平、*谷川琢磨、*坂本さくら（愛知県立豊丘高校自然科学愛好会）、井上亮太（愛知県立

豊丘高校）

「日本産サケ科魚類イワナ *Salvelinus leucomaenis* の背面部白色斑紋と地理的分布の関係」*松田空、*門田啓、*中村彰甫（成蹊高等学校）、荒井靖志（成蹊中学高等学校生物科研究室）

「日高地方のメダカの生態について」*中光咲、沼野加奈、*濱田真衣子、小山桃葉、梶本明宏、松見弦、中井大五、橋本佳多朗、中前勝吾、清水理（和歌山県立日高高等学校）

「静岡市巴川流域におけるカメ類の生息状況とカメと人との関わりについてのアンケート調査」*宮城加菜、*佐野瑞姫、大塚宗汰、三浦結（静岡北高等学校）

「新河岸川の外来種カワリヌマエビ属の侵入」菅原玲、伊藤萌、*堀越えみ、*富田大愛、*中里陽子、安藤華蓮（埼玉県立川越女子高校）

「守れ！カスミサンショウウオ保護活動の推進と生殖行動の解析」*神戸朱琉、*前田晃太郎、*岡田翔吾、後藤暁彦、丹羽大樹、江崎正英、久富匡皓、小島瑛希子、後藤那月、佐賀美月、高山あまね、森本早稀、塩谷祐貴、北村拓斗、鷺見太樹、坪井玲、八戸啓太、矢島佳依（岐阜県立岐阜高等学校）

「行動学的視点から考えるネズミの生態」中武泰成（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校）

「チャンネルキャットフィッシュの環境嗜好性」*千葉利久、阿久津春人（東京都立国分寺高校）

「チームアライグマのこれまでの活動～高校で連携して外来生物問題を考える～」*岩木れん（埼玉県立越谷北高等学校）、*黒田峻平、*大塚悠宇馬、*伊藤太郎（海城中学高等学校）、菅原玲（埼玉県立川越女子高等学校）、小川岳紘（埼玉県立熊谷西高等学校）、原田愛華（埼玉県立越ヶ谷高等学校）、佐藤翔太（埼玉県立坂戸西高等学校）、和知英太（埼玉県立所沢西高等学校）、中村早希（埼玉県立飯能高等学校）、高山凌（埼玉県立蕨高等学校）

「サシバの秋の渡りにおける飛行戦略Ⅱ—飛行パターンから秋の渡りを考えた—」*松岡朋寛、*橋本悠平、橋越清一（愛媛県立南宇和高等学校）

「クラゲの生態」*秋田陽美、*川尻晴菜、辰巳綾理（大阪府立住吉高等学校）

「アリの道しるべフェロモンの分析」今飯田果歩（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校）

「アブラムシ防除における最適条件」越智匠海、菅原麻由、*佐藤直、中陣遥香、日下真帆、中桐悠一郎、岡田和太、*森本建、*東優樹（立命館慶祥高等学校）

英語口頭発表賞受賞者

< Applied Ecology >

【Best Award】

「Regional differences in range shifts of butterflies to climate change and implications for protected areas in Japan」*Misako Matsuba, Minoru Kasada, Tadashi Miyashita (University of Tokyo)

【Excellent Award】

「Do urban squirrels distinguish risk levels exposed by

different potential predators?」*K. Uchida(Hokkaido univ.), K. Suzuki, T. Shimamoto (Iwate univ.), H. Yanagawa (Obihiro univ.), I. Koizumi (Hokkaido univ.).

< Plant Ecology >

【Best Award】

「Respiration and anatomical characteristics of Moso bamboo culms」*Uchida, E.M. (Kyushu Univ.), Katayama, A. (Kyushu Univ.), Utsumi, Y. (Kyushu Univ.), Enoki, T. (Kyushu Univ.), Koga, S. (Kyushu Univ.), Otsuki, K. (Kyushu Univ.).

【Excellent Award】

「Habitat structures controlling the spatial distribution of vascular epiphytes」*Nakanishi, A., Tanaka, M. (Kyoto Univ.), Sungpalee, W., Sri-ngernyuang, K. (Maejo Univ.), Kanzaki, M. (Kyoto Univ.).

< Animal Behavior >

【Best Award】

「Host manipulation by an ichneumonid spider-ectoparasitoid, taking advantage of preprogrammed web-building behaviours for its cocoon protection」*Takasuka, K. (Kobe Univ.), Yasui, T. (Kobe Univ.), Ishigami, T. (Kobe Univ.), Nakata, K. (Kyoto Women's Univ.), Matsumoto, R. (Osaka Museum of Natural History), Ikeda, K. (Kobe Univ.), Maeto, K. (Kobe Univ.).

【Excellent Award】

「Can sex difference in movement patterns really enhance mating encounters? Yes!」*Nobuaki Mizumoto (Kyoto Univ.), Ryota Sato (Hachinohe Inst. Tech.), Naohisa Nagaya (Kyoto Sangyo Univ.), Masato S. Abe (Natl. Inst. Inf. JST), Shigeto Dobata (Kyoto Univ.) and Ryusuke Fujisawa (Hachinohe Inst. Tech.).

< Animal Ecology >

【Best Award】

「Geographic Variations of Acoustic Traits in Japanese Tree Frog (*Buergeria japonica*) in East Asian Archipelago」*Wang, Y.H. (NTU), Lin, Y.P. (TESRI), Tseng, H.Y. (NMNS), LIN, Y.K. (NTU), Lin, S.M. (NTNU).

【Excellent Award】

「Rapid adaptive morphological change of native frog induced by invasive alien mongoose」*Hiroataka Komine (TUAT), Noriko Iwai (TUAT), Koichi Kaji (TUAT).

< Ecosystem Ecology >

【Best Award】

「Predator and prey biodiversity relationship and its consequences on trophic interaction — Interplay of marine nanoflagellates and bacterioplankton」*Jinny Wu Yang, Chih-hao Hsieh (Taiwan Univ.).

【Excellent Award】

「Variation in ecosystem silicon cycling via plants with elevation and bedrock on Mount Kinabalu, Sabah, Malaysia」*Nakamura, R., Ishizawa, H., Kajino, H., Suzuki, S., Kitayama, K., Kitajima, K. (Kyoto Univ.), Wagai, R. (NIAES).

< Animal-Plant Interaction >

【Best Award】

「Functional significance of inconspicuous petals in scent-attracted flowers」*KATSUHARA, K., USHIMARU, A. (Kobe Univ.), KITAMURA, S. (Ishikawa Prefectural Univ.).

【Excellent Award】

「Ecology and evolution of the association between bryophytes and herbivorous insects」*Imada, Y., Kato, M. (Kyoto Univ.).

Ⅲ. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について

2016年3月23日に平成28年第1回理事会が行われ代表理事（兼会長）と業務執行理事が選任された。

1. 代表理事（兼会長）（任期2016年3月～2018年3月）
可知 直毅
2. 業務執行理事（任期：2016年3月～2018年3月）
占部 城太郎（副会長、次期会長候補）
久米 篤（ER編集担当理事）
古賀 庸憲（生態誌編集担当理事）*任期は1年

Ⅳ. 学会各賞受賞者

第14回日本生態学会功労賞

粕谷 英一（九州大学理学部）

Ⅴ. 書評依頼図書（2015年6月～2015年11月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 白山義久・赤坂憲雄編「フィールド科学の入り口 海の底深くを探る」（2015）248pp. 玉川大学出版部
ISBN:978-4-472-18204-4
2. デイヴィッド・N・レズニック著 垂水雄二訳「21世紀に読む『種の起源』」（2015）592pp. みすず書房
ISBN:978-4-622-07936-1
3. 清水長正・澤田結基著「日本の風穴」（2015）300pp. 古今書院 ISBN:978-4-7722-6116-6
4. 宇野木早苗著「森川海の水系 一形成と切断の脅威」（2015）334pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1569-0
5. 永田信著「林政学講義」（2015）170pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-072065-6
6. 国連環境計画（UNEP）編「GEO-5 地球環境概観第5次報告書上」（2015）290pp. 一般社団法人環境報告研 ISBN:978-4-9907839-0-7
7. 高槻成紀編著「動物のいのちを考える」（2015）336pp. 朔北社 ISBN:978-4-86085-121-7
8. 高槻成紀著「シカ問題を考える」（2015）216pp. 山と溪谷社 ISBN:978-4-635-51009-7
9. 高槻成紀著「タヌキ学入門」（2015）240pp. 誠文堂新光社 ISBN:978-4-416-11547-3
10. 菊水健史・永澤美保・外池亜紀子・黒井眞器著「日

本の犬 人とともに生きる」(2015) 236pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060230-3

11. 島野智之・高久元編「ダニの話 一人間との関わり」(2016) 182pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-64043-4
12. 佐藤哲「フィールドサイエンティスト 地域環境学という発想」(2016) 242pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060142-9
13. 日本生態学会編 津田敦・森田健太郎担当編集「シリーズ現代の生態学 10 海洋生態学」(2016) 308pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05745-6
14. 水田拓編著「奄美群島の自然史学 亜熱帯島嶼の生物多様性」(2016) 394pp. 東海大学出版部 ISBN:978-4-486-02088-2
15. レイ・ヒルボーン、ウルライク・ヒルボーン著、市野川桃子・岡村寛訳「乱獲 漁業資源の今とこれから」(2015) 158pp. 東海大学出版部 ISBN:978-4-486-02080-6
16. 五十嵐博著「北海道外来植物便覧 2015年版」(2016) 196pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8225-3
17. 日本生態学会編 川端善一郎・吉田丈人・古賀庸憲・鏡味麻衣子担当編集「シリーズ現代の生態学 6 感染症の生態学」(2016) 358pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05746-3
18. 中野秀樹・高橋紀夫編「魚たちとワシントン条約: マグロ・サメからナマコ・深海サンゴまで」(2016) 224pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-6527-6
19. 大元鈴子・佐藤哲・内藤大輔編「国際資源管理認証 エコラベルがつなぐグローバルとローカル」(2016) 248pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060
20. 藤本潔・宮城豊彦・西城潔・竹内裕希子編著「微地形学 人と自然をつなぐ鍵」(2016) 374pp. 古今書院 ISBN:978-4-7722-7141-7

VI. 寄贈図書

1. 「草と緑 No.6」(2014) 60pp. 特定非営利活動法人緑地雑草科学研究所
2. 「草と緑 No.7」(2015) 66pp. 特定非営利活動法人緑地雑草科学研究所
3. 「第31回 国際生物学賞」(2015) 348pp. 公益財団法人鹿島学術振興財団
4. 「うみうし通信 No.90」(2016) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
5. 「Journal of Environmental Information Science Vol.44, No.5」(2016) 164pp. 一般社団法人環境情報科学センター
6. 「海洋地質図 No.87 金華山沖表層体積図」(2016) CD 産業技術総合研究所 地質調査総合センター
7. 「生物多様性及び生態系サービスの総合評価」(2016) 160pp. 環境賞自然環境計画課生物多様性地球戦略企画室
8. 「北海道爬虫両棲類研究報告書 VOL.004」(2016) 40pp. 北海道爬虫両棲類研究会
9. 「阿寒湖周辺の森と水辺の生き物たち」(2016) 36pp.

北海道爬虫両棲類研究会

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

- (1) The MIDORI Prize for Biodiversity 2016 (第4回 生物多様性みどり賞)
 - ①生物多様性の保全と持続可能な利用に関し顕著な功績のある個人
 - ②木製楯、記念品、副賞 (10万 US ドル)
 - ③ 2016年6月30日(木)
 - ④ The MIDORI Prize for Biodiversity 2016 事務局
- (2) 公益財団法人住友財団 2016年度環境研究助成
 - ①理学(数学、物理学、化学、生物学)の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの(それぞれの分野における工学の基礎となるものを含む。)
 - ②総額1億5,000万円(1件当たり最大500万円、90件程度)
 - ③ 2016年4月15日(金)～6月30日(木)
※E-mailの締切は6月16日(木)となっております。ご注意ください。
 - ④公益財団法人 住友財団
- (3) 公益財団法人住友財団 2016年度基礎科学研究助成
 - ①一般研究:環境に関する研究(分野は問いません。)
 - 課題研究:2016年度募集課題「喫緊の環境問題解決のための学際研究または国際共同研究」
 - ②総額1億円(一般研究8,000万円:1件当たり最大500万円、課題研究2,000万円:1件当たり最大1,000万円)
 - ③ 2016年4月15日(金)～6月30日(木)
※E-mailの締切は6月16日(木)となっております。ご注意ください。
 - ④公益財団法人 住友財団
- (4) 平成28年度第8回とうきゅう環境財団社会貢献学術賞
 - ①日本の環境分野において学術的かつ社会的に特に顕著な業績を挙げた研究者
 - ②賞状および賞金50万円。
 - ③平成28年8月31日必着
 - ④日本生態学会事務局

書評

藤井一至著 (2015) 「大地の五億年 せめぎあう土と生き物たち」ヤマケイ新書 229pp. ISBN:9784635510226
定価 900 円+税

本書は、新進気鋭の土壤学者が一般向けに土壌の成り立ちや変遷について分かりやすく解説した書である。土壤学を学んだことのない人にとって、「土は大事だろうけど、よく分からない存在」と感じている人も多いのではないだろうか？そのような方々にとって、この本は、土壌の面白さや奥深さを知る上で、とても有用な本であると思う。

「大地の五億年」というタイトルは、5億年前に上陸した生物と鉱物の相互作用によって、土壌が生まれたという事実を端的に示している。つまり生物が存在しなければ、土は存在しない。私たちにしてみ慣れた存在である土は、5億年より前には存在しなかった。生物とともに土がどのように変化してきたか、が本書の主要なテーマである。

土から養分を吸収して植物が成長する過程で、陰イオン (H_2PO_4^- , Cl^- など) よりも、塩基性の陽イオン (K^+ , Ca^{2+} など) をより多く必要とするため、湿潤地域では土はほぼ必然的に酸性化していく (外部や地下水からの塩基性の陽イオンの供給がなければ)。本書では、生物だけでなく土もまた大きく変化することを、土の「酸性」をキーワードとして解説している。日本の土壌の多くは酸性である。一般的な紫陽花の花も、日本の土壌では、紫色であるが、ヨーロッパではピンクである。その事実を知っている人は多いだろうが、日本の土壌の成り立ちや特殊性まで知っている人はそう多くないかもしれない。土壤学を初めて学ぶ人にとっては、この本には、「目から鱗」な話題がいっぱい詰まっている。

本書には、著者がスコップ片手に世界各地を巡った知見が散りばめられている。日本各地はもちろん、極域、アメリカ大陸、欧州、熱帯など — 世界各地を巡るには随分な年月がかかりそうなものであるが、著者の藤井一至氏は、1981年生まれ若手研究者である。著者のアクティビティの高さに感心する。また、土壌が主題の本であるが、動植物の生態や文化、歴史など、多くの話題が織り込まれてあり、著者の知見の広さにも驚かされる。藤井氏は、2013年に日本生態学会の鈴木賞を受賞しており、生態学会員にはご存知の方も多だろう。最近も、日本土壌肥料学会の奨励賞も受賞しており、藤井氏の活躍は今後も大いに注目されそうだ。

具体的な内容を紹介する。プロローグでは、地球の歴史、土の語源、農業、土と生物の関わりなど、様々な話題を織り交ぜつつ、「変化」と「酸性」をキーワードとして、土を紹介している。第1章は、5億年前からの陸上生物の進化と土壌形成の歴史がテーマである。原始のコケ・地衣類の放出する有機酸によって岩が溶かされて土が誕生したのち、シダ類の繁茂による本格的な土壌形成を経て、リグニンをもつ木質植物の出現が大量の土壌炭素蓄積時代をもたらした (石炭紀)、木材腐朽菌の出現によっ

てリグニン分解が可能になり現在の物質循環が形成される、という5億年の歴史である。また、この章では、現在の植生と土壌の関係についても、熱帯・極域・日本を事例に挙げてまとめている。特に日本の土壌形成においては、火山灰や湿潤な気候が重要な役割を果たしていることが説明されている。日本で見慣れた黒い土 (黒ぼく土) も世界的には珍しいという。第2章では、土と動物の関係へ話が移り、食虫植物、微生物の役割、キノコを栽培するシロアリ、土を食べるサル、溶存有機物を介した河川への栄養塩供給などの事例を挙げ、様々な生物の栄養獲得の術が紹介される。第3章では、土と人の関係へ話が進み、土壌の違いに対して、農業がどのように“適応”したかについての歴史が述べられる。ここでは、水と土の栄養塩のトレードオフの関係から乾燥地域における灌漑農業による文明開化や、その後の塩類集積による文明衰退、湿潤地域における酸性土壌を焼畑や水田によって克服してきた歴史、農業生産の維持に必要な肥料にかける人々の努力の歴史 (江戸時代の糞尿リサイクル)、そしてハーバー・ボッシュ法による窒素固定の技術革新とそれによる近代農法の確立などが紹介されている。第4章では、土壌の5億年の歴史を振り返った知見をもとに、現在、私たちが抱えている土壌に関わる諸問題にスポットを当てる。化石燃料の使用やプランテーション、食料自給率の低下などを例に、経済活動が土壌にもたらす影響に焦点を当て、我々の生活と土を結びつけることにより土壌の価値を再確認する。

著者の藤井氏の人柄を反映し、本書は、終始コミカルな文体で話が進む。専門書と思って読むと違和感を感じるかもしれないが、一般書としては気軽に読めるものであろう。話の展開は大変巧妙であり、読者の興味を惹きつける。例えば、第1章では、「赤毛のアン」が話題に上がり、アニメに登場する道がどうしてこんなに赤いのか？という疑問から、世界の土壌図と大陸移動の関係の話が始まる。こうした小断や実体験がちりばめられており、一気に読了してしまえるテンポの良さを生み出し、土という文字通り地味なテーマを退屈させず読ませるのに一役買っている。また学術的な内容としても、土壤学分野において一般的な知見や、筆者の研究成果がまとめられているので、「土を知りたいけれども、土壌学の教科書はハードルが高い」という人には適当であろう。逆に、専門知識のある方にとっては、簡素化した説明に対して腑に落ちない点があったり、体系的なまとめが欲しいと感じるかもしれない。

そうした表面上の軽さとは裏腹に、この書には著者の主張も多く含まれている。土壌誕生からの5億年を追うことで、土の上で生きることの困難、それに対し人間や他の生物がどのように適応してきたかをまとめることにより、現在起こる諸問題を考える足掛かりを得ようとしている。書の中でも強調しているように、著者の目的は、“温故知新”である。「科学的知見や歴史をまとめ、土が全ての生物活動の土台であることを改めて強調したい」、そんな著者の強い思いが感じられた。

子供向けの絵本から土壌学の専門書まで、土を取り扱った書籍は数多く存在するが、本書のように一貫したテ

ーマで話が進み、かつ現代の諸問題にまで結びつけた読み物は珍しいと思われる。土壌を知りたい人も、これまで土壌にあまり関心がなかった人も、是非気軽に本書を手にとっていただきたい。土壌という身近な存在にも、様々なドラマやストーリーが隠れており、純粋な驚きや新たな発見があることと思う。

(京都大学大学院農学研究科 源六孝典・小野田雄介)

小山重郎 (2013)「昆虫と害虫」築地書館 278pp. ISBN:978-4-8067-1456-9 定価 2600 円 (税別)

評者は普段ベトナムに駐在してデング熱を媒介する蚊の調査をしている。ベトナムでは Copepoda を用いた媒介蚊の生物的防除が行われたり、最近では昆虫成長制御剤や Wolbachia を用いた防除が行われていたりしているが、デング熱患者が発生した場合には即座に患者宅を中心として殺虫剤散布による駆除が行われる。その結果、ベトナムのデング熱患者の多い場所では非常に殺虫剤抵抗性の高い系統が出てきている。一昨年、国内で約 70 年ぶりに発生したデング熱の国内感染とその後の蚊の駆除の様子をニュース番組で見ていて、考えさせられることがあった。発展途上国から見れば環境問題に関心の高い日本でも、いざ媒介蚊対策となると、結局は殺虫剤散布に頼っていたからである。

衛生害虫を研究している側からみると、農業害虫の防除の概念や実践例は 2 歩も 3 歩も我々の前をいっている印象を受ける。昨今では無(減)農薬・有機野菜が食卓にも浸透してきたが、評者のように地方出身の 50 代以上の人たちなら、以前は日本の農業現場でも農薬まみれだった時期があったことを知っている。この変化は何なのだろう。機会があったら国内の害虫防除の歴史について書かれた本を読んでみたいと思っていた。

著者は農業害虫の調査・研究において第一線で活躍された方であり、これまで多くの害虫に関する著作や翻訳書がある。本書は害虫の解説書ではなく、著者の研究歴に沿ったかたちで昭和 30 年代からの我が国の農林害虫の防除について述べられている。しかも、アワヨトウ、ニカメイチュウ、ミバエ類、マツノマダラカミキリ、斑点米カメムシといった、いわば我が国の応用昆虫学の歴史において欠かせない、重要な害虫を扱っている。

「第 1 章 アワヨトウ大発生謎」は、著者が大学院を修了し秋田県農業試験場に勤務したところから始まっている。当時は農薬一辺倒と呼べる時代であり、農薬の効果試験では物足りないと思った著者が(当時秋田県で問題となっていた稲の害虫のうちで)「いちばん謎の多い」と感じたアワヨトウを研究テーマとして取り上げた経緯やその奮闘りが書かれている。

「第 2 章 農薬のヘリコプター散布を減らすために」では、学会発表で「もっと役に立つ研究をしたらどうだ。」と叱責された著者がアワヨトウの後の研究テーマに悩んだ末に、ニカメイチュウを材料にして、なかば慣習的に行われていた農薬散布をいかに減らすか、という問題に取り組んだことについて書いている。当時は農薬散布直後に水田の付近を通った小学生が死亡したこともあった

そうだ。

「第 3 章 沖縄のミバエ類の根絶防除」では、沖縄県農業試験場のミバエ研究室長としてウリミバエの全域根絶防除について取り組んだことが描かれている。沖縄のミバエ対策という不妊虫放飼法が有名であるが、実際にはその前に毒餌を使ったりして虫の密度を減らす「抑圧防除」という手段が使われたことを本書で初めて知った。

「第 4 章 世界のミバエ類防除」ではメキシコとチリでのチチュウカイミバエ防除プロジェクトの視察の様子と、フィリピンでアドバイザーとしてミカンコミバエの防除プロジェクトに関わった様子が描かれている。

「第 5 章 森は病んでいる」ではマツ枯れとナラ枯れについて書かれている。マツ枯れというとマツノザイセンチュウとマツノマダラカミキリが原因であると評者は学生時代に習ったのだが、実際は単純ではないようだ。昔は焚き付け用に使われていた松葉が林床に堆積するようになってバクテリアや他の糸状菌が増えるため、マツの根の菌根菌が死んでしまい、マツの栄養状態が悪くなる結果、マツノザイセンチュウに侵されやすくなるらしい。

「第 6 章 再び田んぼへ」では斑点米カメムシについて書かれている。著者が就職した当時、イネの害虫として問題となっていたニカメイチュウは、現代ではほとんど見かけなくなったそうである。本書によると、政府が減反政策を実施したことで米の品質が重視されるようになったわけだが、その基準とは米粒が黒ずんでいるか否かという見た目であり、1 等級となるには斑点米が 1000 粒中 1 粒以下までと、非常に厳しいらしい。米の黒ずみの原因となっているのはカメムシの吸汁なのであるが、本書を読むと、そもそも味や安全性とは関連のない基準値をクリアするために農薬の量を増やす意味があるのかと思えてならない。

「第 7 章 昆虫を害虫にしない社会を」では、1 章から 6 章までに書かれた著者の経験を踏まえて、我々が昆虫とどう関わっていくかが述べられている。本書で述べている通り、著者は害虫防除のための殺虫剤散布を否定しているわけではない。ただし、農薬は人体にも環境にも負荷がかかるものであるから、できる限り減らしていきこうというのが著者の基本的な考えであり、その点では在職中でも退職後でも全くブレがない。さらに、そもそもなぜその虫が害虫になったかを農業や社会の変化までも取り入れて解明しようとする姿勢も一貫している。

本書のタイトルは「昆虫と害虫」であり、副題が「害虫防除の歴史と社会」となっていたため、手に取るまでは農業害虫を中心とした古今東西の害虫防除の教科書予想していた。本書は退職してもなお現場重視をモットーに活動する著者の経験に裏付けされた、我が国の害虫防除の変遷について記述した本である。評者の私見では、講義では教科書的な説明よりも経験談の方が頭に残る。そのような観点からみると、本書は記憶に残りやすい、我が国の農業害虫の通史とも言える。読者に農業や昆虫の専門外の人でも仮定しているのであろう、説明も丁寧で、非常にわかりやすかった。

(長崎大学熱帯医学研究所 角田隆)

ピーター・クレイン著 矢野真千子訳 (2014)「イチョウ 奇跡の2億年史」河出書房新社 440pp. ISBN:978-4-309-2530-2 定価 3500 円 (税別)

秋になるとイチョウは黄色い葉を一斉に落とす。そして落ちた銀杏が独特のおいを放つ。しかし銀杏の落ちない場所もある。それはイチョウが雌雄異株だからである。実のおいを避けるため雄木が好まれる場合もあるらしい。イチョウは庭木や街路樹として世界各地で親しまれている。

このイチョウは現存する近縁種のない「生きた化石」でもある。中生代の地球に現れて繁栄し、新生代前半の温暖期には北極地方にも分布した。しかしその後の寒冷化などで衰退し、中国南部でかろうじて生き延びた。約千年前に栽培化され、中世の日本に渡来し、出島からオランダを経てヨーロッパや北米に広げられた。このように人間の文化とむすびつくことで、イチョウは絶滅寸前の状態から救われた。その歴史は希少種の保全策にも示唆を投げかける。

本書はこのイチョウのたどった道を自然史と文化史の両面から跡づける。7部37章から構成されており、導入とイチョウの生態の紹介の後、過去から現在へと旅路をたどる。「第1部 プロローグ」では、イチョウをはじめとした樹木と人間の文化とのかかわりの世界にいざなう。「第2部 植物としてのイチョウの生態」では、光合成や生長のあり方、植物体の構造、そして独特の生殖様式が説明される。イチョウは種子植物でありながら泳ぐ精子をもつ。このことは1896年、平瀬作五郎によって発見された。その発見のエピソードも語られる。

「第3部 起源と繁栄」、「第4部 衰退と生き残り」は、古生物学のバックグラウンドをもつという著者の真骨頂の趣がある。地球上各地のさまざまな年代の化石植物群を紹介しつつ、植物の陸上への進出、種子植物の登場、イチョウの祖先種と系統関係、イチョウの多様化と衰退などの歴史をたどってゆく。分岐学的な評価によっても植物進化に占めるイチョウの位置はまだ定まらないらしい。その一方、「イチョウ様植物」が「いちど多様化したあと多くが滅びて一つの勝者のみ生き残ったという進化像」が化石記録から浮かび上がってきたという。「大きく衰退したのは白亜紀の中期であり」、その原因のひとつとして「被子植物との競争が考えられる」。始新世には「北極圏にイチョウを含む森があった」が、その後の寒冷化と乾燥化によって分布域が南下・縮小し、中国南部に残った。

「第5部 ヒトとの出会い」では、現存するイチョウの古木の樹齢、中国での栽培のはじまり、日本への渡来、ヨーロッパへの導入とリンネによる記載などが語られる。14世紀、ある商船が中国から日本への航海中に沈んだ。陶磁器など2万点を超える物品が積まれていた。それらが韓国沖の海底から引き上げられると、そのなかに「見間違いようのないイチョウの実が1個、含まれていた」。このような物証や記録を本書は丁寧に跡づけてゆく。イチョウのヨーロッパへの紹介には、オランダから出島に派遣されたケンペルなどの医者兼植物学者が重

要な役割を果たした。「第6部 利用価値」では、庭木、食べ物、街路樹、薬としての世界各地でのイチョウの利用が、科学と文化の双方の側面から紹介される。現在ではイチョウの220を超える栽培品種が登録されているという。「第7部 植物の未来を考える」では、現在の生物多様性の危機と関連させながら、希少植物の保全の意義とその手段が論じられる。域内保全と域外保全の双方が必要であるとして、絶滅のおそれのある樹木の域外保全の意義を述べる。この部分は、生物多様性条約の現状と問題点についての力のこもった解説と論評ともなっている。その見解には、キュー植物園の園長を務めたという著者の経歴も反映しているかもしれない。

著者はいう。「イチョウのような植物は、この世の歴史を壮大な規模で照らしだす。」そして「過去を知ること、未来の舵とりにならず役に立つ。」これらの言葉は、歴史家 E. H. カーがかつて次のように説いたことを思い起こさせる。「過去に対する歴史家のヴィジョンが現在の諸問題に対する洞察に照らされてこそ、偉大な歴史は書かれるのです。」

本書を通じて、著者は厚みのある知識と教養を惜しげもなく見せてくれる。それぞれの話題に登場する古今の研究者像も興味深い。自然史と文化史を行き来する本書の叙述は、幅広い読者層の関心に応えるだろう。自然と文化をつなぐこうした多面的な叙述には、カーが説いたような意味で、歴史への今日的なアプローチとして広く一般的な重要性があるのではないだろうか。このような本を書くことには自然史分野の研究者にできる文化的・社会的貢献としても大きな意味があると思う。本書のしめくくりの部分で著者はいう。「樹木は現在の環境変化が速すぎることや、地球の速度に合う暮らしとはどんなものかを教えてくれる。」

なお、平瀬による精子発見のイチョウは、今も東京大学の小石川植物園でその姿を見ることが出来る。

引用文献

E. H. カー著 清水幾太郎訳 (1962) 歴史とは何か (岩波新書). 岩波書店, 東京

(長野県環境保全研究所 須賀 丈)

片野 修 著 (2014)「河川中流域の魚類生態学」学報社 215pp. ISBN:978-4904079126 定価 2000 円 (税別)

私がこの本を知ったきっかけは、「淡水魚の生態学でもっとも活発な研究活動している畏友の(中略)好著。」という言葉を目にしたことでした(めっちゃう言葉を感じました)。魚類学者ではない私が出たような本の書評を書くこと自体、恐縮ではありますが、がんばります。

さて、本書は、河川中流域の環境と魚類研究の歴史(第1章)、魚類群集の特徴と生息環境(第2章)、アユの行動と生態(第3章)、アユが他魚に及ぼす影響(第4章)、雑食性及び肉食性魚類の生態と種間関係(第5章)、魚食魚の生態-ナマズを中心に(第6章)、群集内の複雑な関係-間接効果に焦点をあてる(第7章)、河川中流域における魚類の繁殖様式(第8章)、淡水魚の個体

差と個性（第9章）、淡水魚個体群の保全と再生（第10章）、河川中流域の水産業とその未来（第11章）という章立てで、河川中流域とそれに繋がる小川や農業用水路に生息・利用する魚類を対象に、個体の生態から個体群や群集の動態や種間相互作用等の詳細を紹介した良書であり、魂のこもった意欲作である。

なぜ、魂のこもった意欲作と書いたかは、著者が「先達の研究については、評価すべき点は評価し、批判するべきところは批判するべきである。批判のないところに新しい展開は生まれない、という姿勢で（後略）」と第1章の最後に前置き、後の章に過去の研究事例を詳細に再分析した後に「その理由の1つは、ここで行った批判が、約50年もの間誰によってもなされなかったことにあるのかもしれない」と言及していることから、お分かりだろう。これは一例だが、詳しい中身については、是非本書を手に取り、吟味してほしい。挑戦的ではあるが、過去の研究結果や示唆を再分析するこのような取り組みは、今後も継続して必要であり評価されるべき点であると感ずる。

このような過去の研究成果の再分析に加えて、本書では、著者の調査結果を中心とした研究事例をもとに各章が展開されるが、まず、著者（とその共同研究者）の地道で豊富な観察及び調査結果に圧倒される。野外調査や観測だけでなく、特に、実験池で実施された様々な操作実験の結果は大変興味深い（余談ですが、「3鱭を切る場合に1000個体くらいは個体識別できる（コラム8）」とあったのにも驚きました！）。さらに、統計解析を駆使して、得られた結果をできるだけ客観的に解釈しようとする点にもとても好感が持てる。後者の統計解析についての説明は正直必ずしも十分とは言えないため、フォローできなくなる読者もおそらくいると思うが、読み飛ばしても本書の理解になら問題は無いだろう。また、客観的な証拠が乏しい場合は著者の考えが慎重に展開されており、明確に言えない点や分からない点に言及しないのではなく、敢えて読者にありのままの現状に提示しようとしているようにも感じられた（この点は右も左も分からない初学者にとっては重要で、大変好感が持てます）。

最後に、本書は網羅的な教科書というよりは、各章でテーマに沿った具体的な研究事例を複数紹介し、それらから抽出される普遍的な知見を紹介し、今後の課題等を議論する、という（学術誌における総説に似た）形式になっており、河川生態学者や魚類を含む河川生物に興味のある方にとって、とても読み応えのある仕上がりになっていると思います。それでいて、各章は1時間程度で読了できる分量になっており、通勤時やちょっとした空き時間に読むのにも最適に思われます。個人的には、求めていたウグイに関する具体的な（細かな）情報や過去の重要文献が紹介されていたのも良かったです。以上を一言でまとめますと、「『河川中流域の魚類生態学』に対する著者の魂を感じる良書で、大変お勧め」です。

（東洋大学・生命環境科学研究センター 岩崎雄一）

石原元著（2014）「今西錦司—そのアルピニズムと生態学」五曜書房 247pp. ISBN:978-4434-79826-7 定価1800円

本書は日本の生態学に大きな影響を与えた今西錦司（1902 - 1992）の業績について多角的に論じている。第一部は「その生きざま」と題された短い評伝であり、第二部への導入の役割を果たしている。本書の残りは第二部としてまとめられ、以下の6章からなる。

第一章「著作集」では、今西の著作が11のカテゴリーに分類され紹介される。第二章「今西錦司を解くキーワード」では、キーワードの関係図が示される。第三章「キーワードの説明」では、それらのキーワードが節を立てて順次解説される。本章が一番長く、本書の中核を成しているため、本章の節を列記すると以下のとおりである。1カゲロウ、2山の景観から垂直分布帯へ、3登山、4京都学派、5民主主義科学者協会と今西錦司、6棲み分け、7種社会、8イワナ、9野生動物調査—サル学、10ヒト化（ホミニゼーション）、11進化論、12今西自然学について、13棲み分け理論から種社会論へ、そして今西進化論へ。第四章「周辺群像」では、今西の恩師、同僚、弟子、批判者、今西の学説と関係の深い欧米の学者たちについて述べられる。第五章「今西錦司論」では、今西について書かれた論説、単行本、雑誌の特集号などが紹介される。第六章「今西錦司と日本社会」では、今西が日本社会に及ぼした影響が論じられ、最後に生態学が関連する社会問題についての著者自身の考えが述べられる。

本書の著者は魚類分類学者であり、生物学者としての見識から、冷静かつ客観的に今西の業績を吟味しており、本書は無批判な今西礼賛の書では決してない。著者は大串龍一の考えに同調し、今西の進化論・種社会論・棲み分け理論については科学的価値を全く認めないが、晩年の自然への回帰（自然学）を生態学の本流として高く評価する。しかし、今西自然学が評価できる理由は、本書で十分に説明されていないと感じた。著者が言いたかったことは、本当に評価すべきは、自然をありのままに、まるごと理解しようとし、生涯を通じて、分野横断的、学際的な研究をおこなった今西の「その生きざま」そのものということなのかもしれない。

本書は以上のように、今西について網羅的に、また、バランスよく書かれており、もともと現代書館の「ピギナーズシリーズ」のために企画されたというのも頷ける。本書第五章に紹介されるように、今西についての本はこれまでに多数出版されており、初心者はどれから読んでいいか迷うかもしれない。そんなわけで、本書は、今西についてこれから詳しく知ろうと思う読者が最初に手に取る本としてちょうどよいと思う。ただし、本書のタイトル副題は、多岐に渡る今西の業績のうち、登山や垂直分布帯の研究に的を絞っているかのような印象を与えるので不適切であると感じた。

（鹿児島大学理学部地球環境学科 相場慎一郎）

・公募カレンダー

例年学会事務局に送付される学術賞、研究助成、共同研究などの公募を昨年の締切日順にまとめました。
詳細については、学会事務局あるいは各団体にお問い合わせ下さい。

名称又は種類	授賞又は助成団体	2015年締切 (*印:2016年締切)
研究・活動助成	公益財団法人 とうきゅう環境財団 http://www.tokyuenv.or.jp/invite	1月15日*
藤原賞	公益財団法人 藤原科学財団 http://www.fujizai.or.jp	1月31日*
自然科学研究助成	公益財団法人 三菱財団 http://www.mitsubishi-zaidan.jp	2月2日*
研究援助	公益財団法人 山田科学振興財団 http://www.yamadazaidan.jp	2月26日*
女性研究者奨励 OM 賞	公益社団法人 日本動物学会 http://www.zoology.or.jp/	3月31日*
動物学教育賞	公益社団法人 日本動物学会 http://www.zoology.or.jp/	3月31日*
環境問題研究助成	公益財団法人 ニッセイ財団 http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp	4月4日*
学術振興会賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/	4月13日*
国際生物学賞	日本学術振興会国際生物学賞委員会 http://www.jsps.go.jp/j-biol/index.html	4月22日*
研究助成	公益信託 四方記念地球環境保全研究助成基金 http://www.jwrc.or.jp	5月6日*
The MIDORI Prize	公益財団法人イオン環境財団 http://www.midoripress-aeon.net/	6月30日*
育志賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html	6月12日*
基礎科学研究助成・環境研究助成	公益財団法人 住友財団 http://www.sumitomo.or.jp/	6月30日*
奨励研究助成	公益財団法人 ロッテ財団 http://www.lotte-isf.or.jp	6月27日*
遠山椿吉記念、食と環境の科学賞	一般財団法人 東京顕微鏡院 http://www.kenko-kenbi.or.jp/	6月30日
文部科学大臣表彰科学賞	文部科学省研究振興局 http://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/index.htm	7月27日
研究者育成助成	公益財団法人 ロッテ財団 http://www.lotte-isf.or.jp	7月19日*
朝日賞	財団法人 朝日新聞文化財団	8月25日
尾瀬賞	財団法人 尾瀬保護財団 http://www.oze-fnd.or.jp/	8月31日
社会貢献学術賞	公益財団法人 とうきゅう環境財団 http://www.tokyuenv.or.jp/	
助成事業	公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会 http://www.expo-cosmos.or.jp/	9月17日
記念基金助成	公益財団法人 関西・大阪21世紀協会 http://www.osaka21.or.jp/jecfund/	9月30日
沖縄研究奨励賞	公益財団法人 沖縄協会 http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/	9月30日
木原記念財団学術賞	公益財団法人 木原記念横浜生命科学振興財団 http://www.kihara.or.jp	9月30日
科学技術賞	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月7日*
研究助成	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月7日*
環境研究総合推進費	一般財団法人 日本環境衛生センター http://www.env.go.jp/policy/kenkyu/index.html	11月5日
研究助成	公益財団法人 鹿島学術振興財団 http://www.kajima-f.or.jp/	11月10日

新 LRI 研究課題募集	一般社団法人 日本化学工業協会 http://www.j-lri.org/	11 月 13 日
研究助成	公益財団法人 下中記念財団 http://www.shimonaka.or.jp/	12 月 12 日
環境賞	日刊工業新聞社 日刊工業産業研究所 http://www.nikkan.co.jp/sanken/kankyo	12 月 18 日

**一般社団法人日本生態学会
役員・代議員・委員一覧**

代表理事 (会長)	可知 直毅	2016.3 ~ 2018.3
業務執行理事 (副会長・次期会長候補)	占部城太郎	2016.3 ~ 2018.3
(専務理事)	岡部貴美子	2015.1 ~ 2017.3
(庶務担当)	石井励一郎	2015.1 ~ 2017.3
(会計担当)	池田 浩明	2015.1 ~ 2017.3
(ER 編集担当)	久米 篤	2016.3 ~ 2018.3
(生態誌編集担当)	古賀 庸憲	2016.3 ~ 2017.3
(保全誌編集担当)	長谷川雅美	2015.1 ~ 2017.3

理事 (2016.3 ~ 2018.3)

大澤 剛士	川北 篤
近藤 倫生	佐竹 暁子
鈴木まほろ	辻 和希
日浦 勉	別宮有紀子
宮下 直	湯本 貴和
吉田 丈人	吉田 正人

監事	陶山 佳久	2015.1 ~ 2016.3
	竹中 明夫	2016.3 ~ 2018.3

代議員 (2014.1 ~ 2015.12)

全国代議員	相場慎一郎	井鷲 裕司
	占部城太郎	河田 雅圭
	工藤 岳	五箇 公一
	近藤 倫生	佐竹 暁子
	陶山 佳久	辻 和希
	中村 太士	日浦 勉
	宮下 直	湯本 貴和
	吉田 丈人	

地区代議員	森田健太郎 (北海道)
	鈴木まほろ (東北)
	大澤 剛士 (関東)
	浅見崇比呂 (中部)
	川北 篤 (近畿)
	石川 慎吾 (中国・四国)
	久保田康裕 (九州)

Ecological Research 編集委員会

Editor-in-Chief	久米 篤
Deputy Editor-in-Chief	仲岡 雅裕
Associate Editors in-Chief	福井 学
	Ming Dong

井鷲 裕司	石井 弘明
熊谷 朝臣	三木 健
野口 航	陀安 一郎
富松 裕	辻 和希
小野田雄介	露崎 史朗
山浦 悠一	大塚 俊之
伴 修平	半谷 吾郎
Handling Editors	梶 光一
半场 祐子	木庭 啓介
菊沢喜八郎	松尾奈緒子
工藤 岳	陶山 佳久
佐藤 一憲	日浦 勉
瀧本 岳	北村 俊平
濱村奈津子	村上 正志
松崎慎一郎	中路 達郎
村岡 裕由	工藤 洋
奈良 一秀	角谷 拓
江成 広斗	平田 竜一
大橋 瑞江	兵藤不二夫
福井 大	鏡味麻衣子
飯島 勇人	山尾 僚
小林 真	牧野 渡
佐藤 拓哉	Min Cao
	Pil Sun Park
	Ping Xie
	Niels.P.R.Anten
	Jan Frouz
	Zhijun Ma
	Bo Song
	Sun-Kee Hong
	Rhett D. Harrison
	Raghavendra Gadagkar
	David W. Inouye
	Simon A. Levin
	Mark D. Scheuerell
	Eun Shik Kim
	Stephanie A. Bohlman
	Tsewang Namgail
	Arndt Telschow
	Sergio R. Roiloa
	Jae Chun Choe
	Janne Sundell
	Hoi Sen Yong
	Yunting Fang
	Andrew Lohrer
	Jingyun Fang
	Stuart J Davies
	Cindy Q. Tang
	Franck Courchamp
	Bas W. Ibelings
	Kari Klanderud
	Mathew A. Leibold
	Ariel Novoplansky
	Stephen D. Sebestyen
	Brenden Holland
	E. Ashley Steel
	Jeremy T. Lundholm

日本生態学会誌編集委員会 (2014.1 ~ 2016.12)

編集委員長	古賀 庸憲	
編集幹事	伊東 明	大塚 俊之
	芝田 史仁	
編集委員	市岡 孝朗	小林 剛
	津田 みどり	北出 理

土田 浩治	村岡 裕由
永光 輝義	相場慎一郎
和穎 朗太	島野 光司
鈴木 英治	嶺田 拓也
村上 貴弘	川口 勇生
肘井 直樹	戸丸 信弘
中川 弥智子	笠原 玉青
岡野 隆宏	鏡味麻衣子
今藤 夏子	高田 宜武
箱山 洋	山浦 悠一
三宅 崇	大澤 剛士

竹中 千里	: 大気汚染
矢原 徹一	: 海外渉外
村上 興正	: 環境行政
安溪 遊地	: エネルギー問題
角野 康郎	: 湿地
加藤 真	: 海洋
水谷 瑞希	: MAB
神山 智美	: 環境法

保全生態学研究編集委員会 (2015.1 ~ 2017.12)

編集委員長	長谷川雅美	
編集幹事	角野 康郎	西廣 淳
編集委員	井口恵一朗	石井 実
	石濱 史子	井上 幹生
	植田 睦之	梅原 徹
	奥山 雄大	加藤 真
	角谷 拓	河口 洋一
	倉本 宣	小池 文人
	高田まゆら	高槻 成紀
	中越 信和	早矢仕有子
	藤井 伸二	細 将貴
	増田 理子	三橋 弘宗
	山本 智子	湯本 貴和
	横溝 裕行	横山 真弓

自然保護専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)

委員長	吉田 正人	: 関東・自然公園・エコツアーリズム
副委員長	和田 直也	: 中部
幹事	須賀 丈	: 中部
地区選出委員		
	露崎 史朗	: 北海道
	紺野 康夫	: 北海道
	竹原 明秀	: 東北
	東 信行	: 東北
	川上 和人	: 関東
	野間 直彦	: 近畿
	中井 克樹	: 近畿
	井上 雅仁	: 中国・四国
	大田 直友	: 中四・四国
	逸見 泰久	: 九州
	伊澤 雅子	: 九州
	内貴 章世	: 九州
専門別委員	増沢 武弘	: 高山・亜高山
	竹門 康弘	: 陸水
	清水 善和	: 島嶼
	久保田康裕	: 熱帯・亜熱帯
	横畑 泰志	: 寄生生物
	阿部 晴恵	: 遺伝子
	常田 邦彦	: 鳥獣管理

将来計画専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)

委員長	辻 和希	
副委員長	佐竹 暁子	
	巖佐 庸	粕谷 英一
	酒井 章子	奥田 昇
	五箇 公一	田中 健太
	仲岡 雅裕	中丸麻由子
	小泉 逸郎	立木 佑弥
	三木 健	北島 薫
	森長 真一	塩尻 かおり
	彦坂 幸毅	黒川 紘子
	土居 秀幸	山道 真人

生態学教育専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)

委員長	西脇 亜也	
副委員長	畑田 彩	
非教育学部系枠:		
	嶋田 正和	中田 兼介
教育学部系枠:		
	平山 大輔	丑丸 敦史
	三宅 崇	
高校教員枠	広瀬 祐司	中井 咲織
	宮田 理恵	
博物館枠	亀田佳代子	

大規模長期生態学専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)

委員長	日浦 勉	
	伊東 明	大手 信人
	黒川 紘子	三枝 信子
	仲岡 雅裕	中村 誠宏
	正木 隆	石原 正恵
	中野 伸一	

生態系管理専門委員会 (2016.4 ~ 2018.3)

委員長	鎌田 磨人	: 里山・協働
副委員長	松田 裕之	: 野生生物管理
幹事	橋本 佳延	: 里山林・草原・協働
幹事	西田 貴明	: 協働・制度設計
	西廣 淳	: 河川・湖沼・防災
	角野 康郎	: 湖沼・河川・湿地
	古賀 庸憲	: 海洋
	佐藤 利幸	: 高山
	塩坂比奈子	: 普及
	白川 勝信	: 湿原・草原・協働・制度
	高村 典子	: 陸水

竹門 康弘：河川
 津田 智：草原・湿地
 富田 涼都：環境社会学
 中越 信和：景観生態
 中村 太士：河川
 日鷹 一雅：水田・農業生態系管理
 平吹 喜彦：震災復興
 逸見 泰久：渚・海洋
 正木 隆：森林・林業
 村上 興正：自然保護
 谷内 茂雄：流域管理モデル
 矢原 徹一：保全生物学
 山田 俊弘：森林

深澤 遊
 西脇 亜也
 中井 咲織
 英語口頭発表部会
 日室 千尋
 彦坂 幸毅
 潮 雅之
 韓 慶民

小口 理一
 栗和田 隆
 富山 清升

前野ウルド浩太郎
 黒川 紘子
 杉浦 真治
 仲澤 剛史

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞選考委員会

工藤 洋 2014.8～2016.12
 近藤 倫生 2014.8～2016.12
 松浦 健二 2014.8～2016.12
 鏡味麻衣子 2015.8～2017.12
 日浦 勉 2015.8～2017.12
 吉田 丈人 2015.8～2017.12

大会企画委員会

委員長 川北 篤
 副委員長 山本 智子
 運営部会 中川弥智子 幸田 良介
 關 義和 田邊 晶史
 小池 伸介 辻野 亮
 北村 俊平 竹中 明夫
 (Web) 長谷川成明 森 章
 (広報) 藤田 志歩 陶山 佳久
 シンポジウム部会
 清野 達之 上田 実希
 西嶋 翔太 小柳 知代
 加茂 将史 及川 真平
 佐藤 拓哉 熊野 了州
 若松 伸彦 柴田 銃江
 福島慶太郎 曾我部 篤
 岩田 繁英 東樹 宏和

発表編成部会

西廣 淳 吉岡 明良
 下野 綾子 小泉 逸郎
 土松 隆志 牧野 能士
 山平 寿智

ポスター部会

小野田雄介 北条 賢
 近藤美由紀 野田 響
 岡本 朋子 加藤 知道
 小口 理一 永松 大
 池田 紘士 赤坂 卓美
 栗和田 隆 安立美奈子

高校生ポスター部会

高原 輝彦 山村 靖夫
 宮田 理恵 水澤 玲子

野外安全管理委員会

委員長 鈴木準一郎 2016.4～2018.3
 粕谷 英一 2016.4～2018.3
 石原 道博 2016.4～2018.3
 北村 俊平 2016.4～2018.3
 大館 智志 2015.4～2017.3
 飯島 明子 2015.4～2017.3
 奥田 昇 2015.4～2017.3

キャリア支援専門委員会 (2016.4～2018.3)

委員長 中坪 孝之
 副委員長 宮下 直
 上野 裕介 大西 勇
 黒瀬奈緒子 鈴木 智之
 高村 典子 西田 貴明
 沼田 真也 別宮有紀子
 水野 晃子

オブザーバー

荒木希知子 岩井 紀子
 可知 直毅 木村 恵
 佐々木晶子 塩尻かおり
 富田 基史 半場 祐子
 深谷 肇一 三宅 恵子

電子情報委員会 (2016.4～2018.3)

委員長 竹中 明夫
 久保 拓弥 大澤 剛士
 富田 基史 眞板 英一



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2016 (平成 28) 年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける 2016 年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

1. プロジェクト

大型共同研究としては、流動連携機関である総合地球環境学研究所 (地球研) との共同企画プロジェクト「生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会 生態システムの健全性」(研究代表者: 奥田 昇)、および「自然条件下における生物同調現象」(研究代表者: 工藤 洋) (科学研究費補助金、基盤研究 S) が進められている。これらのほか、JST 戦略的創造研究推進事業 (CREST) (2 件)、地球研との環境省環境研究総合推進費による共同研究 (1 件)、科学研究費補助金による研究 (32 件)、JST 戦略的国際科学技術協力推進事業 (1 件)、融合チーム研究プログラム (SPIRITS) (1 件)、国立極地研究所研究プロジェクト (2 件)、民間財団寄付金による研究 (6 件) なども進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業 (次頁の表を参照)

2016 年度の共同利用・共同研究事業として、分野間の交流や若手研究者育成の観点から、10 件の共同研究、7 件の研究集会・ワークショップを採択した。開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度 (第三金曜日) センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室 (会場への道順は、センターのホームページ参照) の予定である。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に 3 回 (7 月、11 月、3 月) 発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

京大附置研究所・センターの一般公開イベント「京大ウィークス」に時期を合わせ、一般公開「授業で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。また、大学院入試案内のためのオープンキャンパスも開催の予定。日程などはいずれもセンターホームページに掲載する。

7. 共同利用施設

大型分析機器: DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置 (元素分析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置 (熱分解型元素分析計)、GC/C (ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、LC/C (高速液体クロマトグラフ付き前処理装置) を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus と、PreCon-GasBench

II (自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス)、元素分析計、GC/C を装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計 2 台が稼働している。琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。シンバイオトロン：陸域モジュール、水域モジュールが利用可能である。実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験

池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤
安定同位体関係：木庭
観測船関係：合田
シンバイオトロン関係：高林
実験圃場林園関係：酒井

8. 協議委員会、運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

平成 28 年度 共同研究・研究集会・WS 採択申請一覧			
近藤竜二	福井県立大学 海洋生物資源学部	共同研究 a	水圏の嫌気環境における原生生物共生菌の生態
高巢裕之	長崎大学大学院 水産・環境科学総合研究科	共同研究 a	琵琶湖深水層において酸素消費を駆動する微生物相互作用プロセスの解明
WELLS, John C.	立命館大学 理工学部	共同研究 a	Development of a "Lake Biwa Nowcast System". Application to Clarify Plankton Ecology
嶋田正和	東京大学大学院 情報学環 総合文化研究科	共同研究 a	真社会性狩り蜂の女王における多回交尾の進化過程の解明
豊田健介	日本歯科大学 生命歯学部	共同研究 a	琵琶湖における新奇珪藻感染性ウイルスの探索
田中祐志	東京海洋大学 海洋科学部	共同研究 a	高速ビデオ観察による動物プランクトンの遊泳様式の研究
太田祐子	日本大学 生物資源科学科	共同研究 a	世界自然遺産小笠原における南根腐病による樹木枯死メカニズムの生理学・組織学的解明
髙谷 匠	京都大学大学院 理学研究科	共同研究 a	野生霊長類糞尿の炭素・窒素安定同位体分析による食性推定
清水健太郎	Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich	共同研究 a	異質倍体植物の環境適応
乾 陽子	大阪教育大学 教育学部	共同研究 a	着生シダのアリ植物を独占する攻撃的なアリが林冠の群集構造に与える影響
矢崎健一	森林総合研究所 植物生態研究領域	ワークショップ	樹木の乾燥枯死、樹病枯死メカニズムの解明と温暖化等による乾燥影響評価
中野伸一	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 木曽川
木庭啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2016
辻 瑞樹	琉球大学 農学部	ワークショップ	進化と生態の階層間相互作用ダイナミクス：生態学のリストラ 3
柴田英昭	北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター	ワークショップ	ILTER Nitrogen Initiative 国際トレーニングコース：Long-term trends in nitrogen cycles in ecosystems -Field monitoring and global comparisons-
吉田弥生	京都大学 野生動物研究センター	研究集会	2016 年度 勇魚会シンポジウム「海棲哺乳類の音響研究の今」
坂本敏夫	金沢大学 理工研究域 自然システム学系	研究集会	シアノバクテリアの生態学：その先端と将来

センター関係者の動き

- 1) 東京農工大学の木庭啓介准教授が、2月1日付で教授に就任しました。
- 2) 大園享司准教授が、4月1日付で同志社大学へ転出しました。
- 3) 鈴木俊貴氏が、4月1日付けで研究員に採用されました。
- 4) 門脇浩明氏が、4月1日付けで研究員に採用されました。
- 5) Jeremy James Piggott 氏 — (オタゴ大学 (ニュージーランド)・リサーチフェロー) が、招へい外国人学者として平成 28 年 3 月 28 日～平成 29 年 1 月 27 日までの予定で滞在中です。
- 6) Timothy Paul Craig 氏 — (ミネソタ大学 (アメリカ合州国)・教授) が、招へい研究員 (客員教授) として 6 月 1 日～9 月 23 日まで滞在予定です。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	年会費*	大会発表	総会・委員 (選挙・被選挙権)
正会員（一般）	9500円	○	○
正会員（学生）	6500円	○	○
賛助会員	22000円	×	×

*生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 正会員・保全誌定期購読者のみ有
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- ・日本生態学会誌 600円
- ・Ecological Research 900円
- ・保全生態学研究 2000円**

**非会員の方の保全誌定期購読料は年額5000円です。なお、保全誌は発行後2年間、オンラインアクセスができません。

地区会費

正会員は、住所（所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう）により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区（200円）：北海道
- ・東北地区（600円）：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区（400円*）：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区（0円）：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区（400円）：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中・四国地区（400円）：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区（700円）：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

*ただし当面は徴収しない

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@bunken.co.jp

Tel: 03-5937-2721 Fax: 03-3368-2822